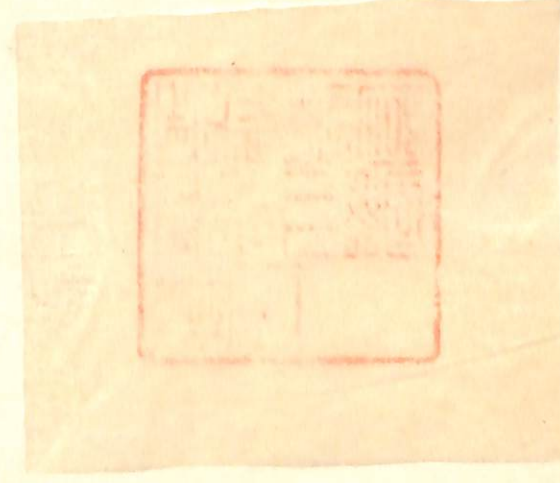


龍溪子集

911.3	八	
-------	---	--

誹諧師手鑑

附 作者列傳



俳諧師手鑑前集編者井原西鶴眞蹟

朝花見好里 西鶴

俳諧師手鑑後集編者佐倉文經眞蹟

長門花見好里 文經

伊藤松宇所藏

誹諧師手鑑前集編者井原西鶴眞蹟

朝花見ぬ里も
ふり月 西鶴

伊藤松宇所藏

誹諧師手鑑後集編者佐倉笑種眞蹟

長川瓜又物れ
あゝ見 笑種

伊藤松宇所藏

解 說

本書の原版は俳書中の權威と稱さるゝもので、前集は編者井原西鶴の序に、延寶四丙辰陽月廿五日。後集は佐倉笑種の序に元祿十三庚辰陽月上旬とあつて、豎一尺二寸九分横八寸九分と云ふ唐紙刷の大本帙入二卷である。本書出版元は奥附に名記が無いから不明であるが、原所藏者は蘭學者桂川甫周の實弟森島中良又の名森羅亭萬象と云ふ天明の狂歌界で世に知られ、紅毛雜話を著はして有名な人の舊藏であつた。其後珍書屋達摩屋五一の手に移り、夫れから私の藏となつたので、孰れも卷頭に押捺してある藏書印が物語つて居る。本書が初めて世に紹介されたのは、石川巖氏が「西鶴全集」を出版された當時俳諧篇第一卷に、帝國大學國文學研究室の所藏にかゝる舊洒竹文庫のものを前集だけ編入せられたものあるのみである。併し之は手鑑をそつくり出したのではなく、本文を活字にしたのみで手鑑と云ふ名實が添はぬと、前集中に所載の俳句のみを編入されたのであるから、古人の墨蹟を偲ぶと云ふ便すがにはならぬが、石川氏が初めて世に紹介されたと云ふ功績は没すべきでない。

世に古筆の手鑑と云ふものはあれども、俳諧の手鑑と云ふものは本書が嚆矢であつて、全く前古無比のものである。されば寶曆元年十二月大夢庵毛越が「古今短冊集」を編したが、彼の自叙にも本書の事が引かれて居ない。跋の蕪村が文中に

〔前略〕大夢子が古今短冊集出て大にいにしへの名流を集め、ちかく當時の同盟を會す、まことに其風詠聲あるがごとく、その手澤うごくがごとし、こゝにおいて人始て俳諧の美をしり、風雅の徳を仰ぐ、たとはゞ首山葵丘の盛なる森然として見るべし、穴かしこ余が論むなしからず、はた毛越を稱して俳管仲と呼で論中の盟主となさん歟、毛越笑て余に跋をもとむ、余曰於我子亦管鮑の交あり、辭すべからずつゝ、此言をもつて書。

寶曆辛未冬

東都囊道人蕪村誌

斯様に記されてあつて、毛越も蕪村も、先鞭をつけられたる西鶴の手鑑には一言半句も言及して居らざる所を以て視れば、兩人とも本書の世に在ることを知らざりし哉、必せりである。又明和元年に雪中庵蓼太が芭蕉翁眞跡集を編纂されたが、更に其噂さがない。斯る著名な人々でさへ知らざりしものなれば、之を往時に溯つても元祿五年に出版せし阿誰軒柳麿の「俳諧書籍目録」にも、同じく十五年に出版せし俳諧書肆井筒屋の「俳書値段附書目」にも亦合類書籍目録大全にも見る所がない、唯僅かに書名の存するものは「俳家大系圖引用書目」の中に「書名ノ首ニ●ヲツケシハ俳諧古集作者盡ノ引書ナリ」とありて、本書名を列記したるものと「新群書類從第七書目中」に延寶四年出版のもの、み見えたる外私の陋見に觸れたるものがない。

所で又僅かに世に傳はつた本書の前集に彼の俳聖芭蕉翁を始め蕉門の人々が此編に漏れた事である。本書の出版された延寶四年の正月は芭蕉翁は未だ三十三歳の壯年時で、小石川關口の水道工事を了へて深川の杉風が別墅に移り、風蘿坊、錢杖子など、稱して住まはれた翌々年の春であるから、遺憾ながら文名嘖々

たる井原西鶴の眼には未だ映じなかつたのである。西鶴の歿したのは元祿六年八月十日で、芭蕉翁より僅かに二歳の年上であつたが、世に大名を揚げたのは遙かに早かつた故でもあつたらうが、兎に角西鶴が編した本書の前集には芭蕉翁の手腕が見認められなかつたのである。

元祿十三年に佐倉笑種が後集を編した時は芭蕉翁の歿後六年の後であつたが、前集の出版後廿四年の後であるから芭蕉翁の聲名と德望とは大したものであつたから、後集には無論編入されたのであつた。從て前集に漏れたる蕉門の徒其角、嵐雪、木因、蛟足、諷竹、尙白、團友、之白、舍羅、荷兮、女流では智月、その女等々、蕉門以外の俳豪には彼の木枯の言水、蛇之介、常矩、白炭の忠知の三家あり、其他來山、鬼貫、素堂、沾德、三千風等の諸名家を數ふ。茲に至て前後集揃うて初めて完備せるものと云ふべきである。

又本書の内容に至りては、前集の卷頭には俳諧の鼻祖守武、宗鑑を始め貞門の一派は固より談林の徒は巨頭宗因を卷軸にあらまし網羅してあり、其外縉紳家にありては、烏丸大納言光廣卿、二條前關白康道卿の堂上方を始め、内藤左京、大村因幡守、小堀遠江守、水野半左衛門等の大名小名を見る。又後集には、青蓮院尊澄法親王、殿下をはじめ、近衛三藐院信尹公、西洞院時成卿、細川玄旨法印、京極甲斐守、内藤下野守等の親王家や名門諸公卿並に諸侯等俳諧を弄ぶ當代のあらゆる界級の人々は網羅し盡してある。是に因て之を觀れば、此時代に於ける俳壇は什麼に旺盛であつたかを想察することが出來やう。

右前後集兩編を通じて四百九十二人の名家の短冊に揮毫せる墨蹟集は實に數千圓を以てしても購ひ得ざるものである。嗚呼、蕪村、蓼太の如き俳豪も在世本書あることを知らずして逝かれしは如何にも痛恨事

であつた。私は斯る珍籍を獨り擅まゝにすることを遺憾として、數年前俳諧の遺墨珍書等を扱へる友人に本書の覆刻を詢りしも半途にして長逝され。其後二三の書肆が覆刻を企てたが、本書の形態容式が如何にも長大巨冊にて原版の儘では今日の民衆的に沿はず、且つ何分にも非常な高價につくので一般の愛書家に適せずとありて中止することになつたのである。然る所茲に書肆厚生閣主人が本書の事を聞き傳へ幾多の書估が孰れも躊躇せるを慨し、奮然起て事に方り本書の形態を稍縮少し、字體は毫厘も違はぬやうにオフセット版を以て鮮明に印刷し。又原書の書體に處々難讀の文字多ければ、これを更に活字に改譯して平易にし、併せて作家の傳記を添へ以て大方の愛好者に頌たんと希望を述べられ、遂に義俠的態度に出て之を引受けて呉れる事に成つたので、私が年來の宿志を爰に達成せしめられたことを深く多とするのである。

本書に添加したる俳人の傳記については大西一外君を始め今田謹吾君、鎌田賢吉君を煩はしたる事尠なからず、爰に特記して深く謝意を表す。

昭和五年初冬

礫川關口芭蕉庵に於て

伊 藤 松 宇 識

誹諧師手鑑作者及列傳目次

作者	本文頁數	列傳頁數	作者	本文頁數	列傳頁數	作者	本文頁數	列傳頁數
荒木田守武	一	一	末吉道節	六	五	柏井一正	一二	七
一夜庵宗鑑	一	一	織筆齋春可	七	五	豐藏坊信海	一二	七
烏丸光廣	一	二	江崎幸和	七	五	正法寺成安	一三	八
松永長頭丸	二	二	西岸寺任口	七	五	柏原ステ	一三	八
本勝寺日能	二	二	北村季吟	八	五	內藤風鈴子	一三	八
安來庵策傳	二	二	加藤磐齋	八	五	松山玖也	一四	八
津田休甫	三	二	石田未得	八	六	中川喜雲	一四	八
野々口立圃	三	三	半井慶友	九	六	圓滿寺皆虛	一四	八
松江重頼	三	三	高瀬梅盛	九	六	富永燕石	一五	九
齋藤德元	四	三	池田正式	九	六	山田光貞	一五	九
花畠坊空存	四	三	岡部元綱	拾	六	福井知德	一五	九
雞冠井令德	四	四	小濱嘉隆	拾	七	若山定時	一六	九
安原正章	五	四	若山宗明	拾	七	水野榮甫	一六	九
高嶋立札	五	四	馬淵重治	一	七	昌雲軒春清	一六	九
山本西武	五	四	夕陽庵道寸	一	七	勝尾寺義空	一七	九
光貞之妻	六	四	中井正直	一	七	岩手宗也	一七	九
壬生昌意	六	四	荻野似空	二	七	大村一風	一七	一〇

三三三三三三三三三三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三三三三三三三三三三

一五一四四四四四四四四四四三三三三三三三三三
一四四四四四四四四四四四四三三三三三三三三三

蔭山休安

一八

一〇

清淨院哥慶

一八

一〇

伊藤則常

一八

一〇

山田正友

一九

一〇

川崎宗立

一九

一〇

内田平吉

一九

一〇

林御門跡

二拾

一〇

青地可賴

二拾

一〇

堺盛之

二拾

一一

符類屋改信

二一

一一

尾ノ關乘言

二一

一一

岡本胤及

二一

一一

渡邊氏重

二二

一一

山田孝晴

二二

一一

半井一六

二三

一一

松坂和年

二三

一一

北峯正甫

二三

一一

隼士常辰

二三

一一

女榮春

二四

一一

山岡元隣

二四

一一

也田是誰

二四

一一

善	宮	釋	川	川	古	高	佐	片	津	宇	中	寂	藤	在	井	池	尼	松	前	春
通	川		邊	崎	筆	梨	伯	桐	田	野	嶋	光	田	馬	口	嶋	坂	岡	坊	陽
寺	正	梵	長	靜	一	野		良	屋	淨	貞	寺	彩	壽	如	成	好	好	芳	軒
以	由	益	治	壽	村	也	弁	保	勝	治	宜	泰	雲	白	貞	之	道	女	心	加
圓												圓								友

三九 三九 三九 四拾 四拾 四拾 四一 四一 四一 四二 四二 四二 四三 四三 四三 四四 四四 四四 四五 四五

二〇 二〇 二〇 一九 一九 一九 一九 一九 一九 一九 一八 一八 一八 一八 一八 一八 一八 一七 一七

釋	南	一	八	秦	荒	谷	西	能	石	齋	小	岩	宮	飯	西	水	高	金	池	林
蒲	方	時	木	一	木	忠	村	本	田	藤	野	井	邊	田	村	野	瀧	松	田	
劍	由	惟	宗	景	武	由	良	一	未	禾	久	來	吟	成	可	賴	益	友	宗	定
		中	久		珍		菴	直	琢	刀	重	安	松	次	玖	廣	翁	世	旦	親

五二 五二 五二 五一 五一 五一 五拾 五拾 五拾 四九 四九 四九 四八 四八 四八 四七 四七 四七 四六 四六 四六

[illegible]

多門院問加	藤田不琢	林宗甫	西田久任	森親信	今井正盛	棕梨一雪	高田隣寶	前川由平	吉岡信元	延澤破扇子	吉田立敷	高木川松意	山田二休	高井立志	桑門宗玕	川崎方孝	團野朋之	高石石齋	石倉一入	北村宗利
-------	------	-----	------	-----	------	------	------	------	------	-------	------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------

五九 五九 五九 五八 五八 五八 五七 五七 五七 五六 五六 五六 五五 五五 五五 五四 五四 五四 五三 五三 五三

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百



六七
六七
六七
六八
六八
六八
六九
六九
六九
七拾
七拾
七拾
七一
七一
七一
七二
七二
七二
七三
七三
七三

[illegible]

奧	金	嶋	堀	山	平	栗	兒	粕	小	淺	犬	武	山	蔭	西	中	朝	竹	蓮	谷
西	剛	木	內	城	山	田	玉	谷	松	沼	井	野	田	山	院	堀	江	井	花	松
友	院	正	交	貞	方	立	規	一	原	贊	貞	保	竹	無	紀	幾	種	嶺	寺	西
	恩							滴	長	也	恕	俊	犬	睦	子	音	寬	利	吟	丸

作 者			本文頁數		列傳頁數		
牧野西鬼	八一	三三	雁金休音	八八	三六	武野俊佐	九
岡田満足	八一	三三	久能徳窓	八九	三六	辻宗順	九
梶山保友	八一	三三	大和田武門	八九	三七	近藤幽山	九
小堀宗甫	八二	三四	柳原正房	八九	三七	小西來山	九
前關白康道	八二	三四	富田宗祐	九拾	三七	東常倫	九
西山宗因	八二	三四	卜 琴	九拾	三七	飯袋子重道	九
誹諧師手鑑後集作者及列傳							
硯氏一武	九拾	三七	池西言水	九七	九八	櫻井親十	九八
大平伯貞	九一	三七	齋藤賀子	九一	三七	鹿嶋宗純	九八
末吉寸斗	九一	三七	妙滿寺素桂	九二	三七	尼智月	九九
岩田有哉	九一	三七	喜多泰重	九二	三八	晚翠堂桂葉	一〇〇
平尾幸以	九二	三七	志賀俊安	九三	三八	そ の 女	一〇〇
内山一彥	九二	三八	田中常矩	九四	三八	小澤卜尺	一〇一
宗雲寺山石	九二	三八	草恩院日怡	九四	三八	久遠寺空雅	一〇二
八千代	九三	三八	足代弘氏	九五	三九		一〇二
加藤村俊	九三	三八					
榎倉武因	九三	三八					
伊勢村次良	九四	三八					
山川無樂	九四	三八					
中野一直	九四	三八					
北村正立	九五	三八					
松岡定用	九五	三九					

加納道興	一〇二	四一	永昌軒弁朗	一〇九	四四	樋口山夕	一二六
武田三吉	一〇三	四二	神野忠知	一一〇	四四	川崎正信	一二七
蜂屋宗富	一〇三	四二	佐伯小弁	一一〇	四四	鈴村信房	一二七
岡村正辰	一〇三	四二	谷木因	一一〇	四四	喜多田爲親	一二七
水野梅吟	一〇四	四二	三井秋風	一一一	四四	石井令富	一二八
松江近吉	一〇四	四二	澤田由健	一一一	四四	西岡泰德	一二八
清水言聽	一〇四	四二	萩原律友	一一一	四四	内田正朝	一二八
荒瀬金門	一〇五	四二	高瀬元晴	一一二	四五	藤吉貞兼	一二八
馬場久次	一〇五	四二	隅田路春	一一二	四五	服部嵐雪	一二八
岡嶋猿風	一〇五	四二	鴨水只丸	一一二	四五	桑門離雲	一二八
岡宣慶	一〇六	四二	河口保成	一一三	四五	鷹峰土也	一二八
宮川了味	一〇六	四三	水間沾德	一一三	四五	大野秀和	一二八
橋本每延	一〇六	四三	山田賀種	一一三	四五	佐竹直親	一二八
藤村倫員	一〇七	四三	中山榮治	一一四	四五	榎本其角	一二八
富松吟夕	一〇七	四三	淀屋重當	一一四	四五	和田蚊足	一二八
半田常牧	一〇七	四三	芳賀一品	一一四	四六	德成寺智詮	一二八
松浦廣寧	一〇八	四三	内田橋水	一一五	四六	露吸庵和及	一二八
淺井正村	一〇八	四三	井上友房	一一五	四六	小作宗連	一二八
光堂愚鈍	一〇八	四三	佐々木道繁	一一五	四六	渡部未	一二八
齋藤如泉	一〇九	四三	藤本盛庸	一一六	四六	岡昌	一二八
白江醉鶯	一〇九	四四	田代松意	一一六	四六	水野福	一二八

大淀三千風 國友重軌 小野氏範 本就院知春 青木友雪 草壁舉白 伊藤賴富 望月重方 勝圓寺光 木原宗圓 神季貞 槐本諷竹 沙門幽明 櫻井友吉 桑門西海 上嶋青人 北條團水 江左尙白 小原正尙 下村康吉 三輪一鐵

一三三 一二四 一二四 一二四 一二五 一二五 一二五 一二六 一二六 一二六 一二七 一二七 一二七 一二八 一二八 一二八 一二九 一二九 一二九 一三〇

四九 四九 四九 五〇 五〇 五〇 五〇 五〇 五〇 五〇 五〇 五〇 五〇 五〇 五〇 五〇 五〇 五〇 五〇

鳥路齋文十 松井方寸 福井重種 大淵玄弘 遊行上人他阿 長井蚊市 可定明鄉 林田團友 岩田本春 野田本春 富田譽文 坂東杏醉 谷崎谷遊 白井春丸 澤井そ河 小西似春 牧野晴嵐 木村三箇 根來之三白 井狩友靜 高嶋及加

一三〇 一三一 一三一 一三一 一三二 一三二 一三二 一三三 一三三 一三三 一三四 一三四 一三四 一三五 一三五 一三五 一三六 一三六 一三七

五二 五二 五二 五二 五二 五二 五二 五二 五二 五二 五二 五二 五二 五二 五二 五二 五二 五二 五四

西村一禮吟 中谷立靜 小方窩天垂 十方窩天垂 藤井宗余 松苔軒可常 原田貞伸 汲谷軒好春 榎並舍羅 池田常知 小野松綠 高井立志 高吉定祐 光吉定祐 高嶋轍士 岩橋豐流 阿形但秀 福井重昌 荒尾直久 原不卜 由良正春 乾昨非

一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一四 一四 一四 一四 一四 一四 一四 一四 一四 一四 一四 一四

陳穀言曰——
初初之日——
右人多——
——
名母之子——
是也——
——

南東証據を以て是れを様とす
侍家又其年乃婦と号す
婦人漢姓初の如く名を建とす
之し其後振中と名たり其由は
乃選とすとの如し

松本素軒

西暦四百陽月廿日 井原



伊藤 孝文田中氏

春 日 之 光 輝 萬 古 如 新

山崎 一 氏 藏 宗 鑑

萬 古 如 新 萬 古 如 新

馬 老 大 綱 言 光 廣 公

宮 八 十 二 歲 忌

元 日 丑 也

萬 古 如 新 萬 古 如 新

劉永福 敬啟

越前本勝寺目能

張之洞

京 莊 賴 寺 安 永 庵

蘇軾詩集卷之四

大坂 津田休甫

元皇國集部 卷之四

京 野口松翁

元皇國集部 卷之四

同 松江維舟

下文平胡集部 卷之四
皇朝

蘇軾詩集

京 安原守章

先公守章

江 高崎元礼

元礼

京 山本西武

西武

山田 昌子

大

天長元年九月廿一日
山田 昌子

昌子 生主

秋葉朝成
昌子

昌子 生主

一ノ巻
昌子

京 鐵筆春

松子如龍之記

京 江崎幸和

之可也之目之月

尤見 西寺

秋風十月宮殿

枕、石田赤得

江、石田赤得

石田赤得、石田赤得

堺 半井慶友

半井慶友

京 高瀬佳子

高瀬佳子

和歌 松田武

松田武

泉羽生田島松老徳

10

江守平治寺松老徳

坂 小漢氏松殿

平治寺松老徳

紀羽 若山宗明

平治寺松老徳

京 町 岡 宗 時

宗 岡 宗 時 謹 啓

天 主 寺 父 獨 庵 春

獨 庵 春 謹 啓

京 中 井 正 直

正 直 謹 啓

京 寂野 安静

111

寂野 安静 之 寂野 安静

堺 有井 一正

寂野 安静 之 寂野 安静

八幡山 老松

寂野 安静 之 寂野 安静

想 何事無成

想 何事無成 何事無成

丹波植原女ステ

丹波植原女ステ

善城 内藤左京殿

善城 内藤左京殿

大坂松山松

一四

大坂松山松
大坂松山松

廣島中川松

大坂松山松
大坂松山松

大坂松山松

大坂松山松
大坂松山松

花 馬永譽

花 馬永譽

張 田家貴

張 田家貴

京 福井知德

京 福井知德

紀陽 若山安時

14

此書乃自他處取也

大坂 水野榮甫

此書乃自他處取也

江戶 島野新養

此書乃自他處取也

津國勝筆堂

蘇門答臘島

蘇門答臘島

蘇門答臘島

蘇門答臘島

蘇門答臘島

和初前清海院

無名氏白雲

大坂 天徳山安

金毛の翅又紅の袖裏紙生

和嘉 前清浄院

泉板の煙火の白用 永年

京 佐藤則常

白巾焼一花無清かゝ 常

修 山田家

大月集巻一 四十五

大坂 川崎家

秋廣行巻二 四十六

京 内田家

大月集巻一 四十七

無心之杖曲、
一、然主 林

所 以 爲 傳 之 可 也 可 頼

亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

京 符類彦政信

明日花より草 人の心草 路

江 彦國彦書

明日花より草 人の心草

彦 景来流

明日花より草 人の心草 彦國彦

東渡邊氏室

1111

東渡邊氏室
東渡邊氏室

保壽 山房全晴

一發如掃之風人部云 壽

太極 東行天下

東通一氣之理也 用 天

東渡邊氏室

京松板和年

川原一葉の如く花は春

大坂中津屋

花は春の如く花は春

京佳主親祐軒

花は春の如く花は春

大坂 女學素

二四

富士之峰より
望む

京 雲之嶽

富士之峰より
望む

橋本 池田景雄

富士之峰より
望む

堀 阿部林庵

己亥年八月廿五日

伏見 高瀬道甫

己亥年八月廿五日

京 太村可全

己亥年八月廿五日

友 伴將意類

114

書。母。仁。而。下。部。意。類

伴將 竹内二葉軒

生。子。中。花。部。意。類
口。心。月

江戸 堀満直

江戸 堀満直 部。意。類

加賀 本松可理

加賀 太極可理

月一星子集九漢不故可理

京 眼邪留校子

月一星子集九神不故

和而 義集山三助殿

培光方
の
中

志海一也培光

京 臣新幸和亭

二

京 臣新幸和亭

京 臣新幸和亭

京 臣新幸和亭

京 臣新幸和亭

京 臣新幸和亭

直貞王手 撰

直貞王手 撰

義興井 坂

義興井 坂

殿 義興井 坂

義興井 坂

同安人張之洞書

傳書田受

同安人張之洞書

尾張 張之洞書

同安人張之洞書

河内 清水春雪

清水春雪の河内

大坂 了斎玄翁

了斎玄翁の河内

京 井上友貞

井上友貞の河内

謝一峰先生

大坂 信將抄 宗書

王叔平 福國 主

河内 三金永覽

曉東先生

京 蘇 唐 宗 隆

予 之 知 也 凡 此 皆 宗 隆

江 門 楊 秉 文

江 門 楊 秉 文 之 書

江 門 楊 秉 文

江 門 楊 秉 文 之 書

太坂 凌谷安明

四三

此後之世也

江戶 石田英言

一、此後之世也

江戶 石田英言

此後之世也

展覧 一原泰然

萬石の石物記 新

京 谷口重然

万石の石物記 新

傳 堀田不沙

万石の石物記 新

有權增祝增中善賢如

新

大坂 慶雲軒

三三三

三三三

字

京 井野口流味

繪・口・如・機・之・花・流・味

流春水張尾

蘇軾詩集卷之八

西坡 天神 塔

卷之八 詩集卷之八

蘇軾詩集

蘇軾詩集卷之八

大坂川端方丈

三

大坂川端方丈

大坂川端方丈

大坂川端方丈

大坂川端方丈

大坂川端方丈

王羲之 春蘭軒

風雲華雨，
春，

樓前坊

春之，
春，

京都安用書

春之，
春，

大板 尾張好道

四〇

雲心能心能心能心能

堀 池宗本

白雨心能心能心能心能

大板 井口玄真

雲心能心能心能心能

江功在馬友仙

江門江門江門江門

楊河家藤田友蘭

歌子酒子 醉子 三月夜 醉子

京 寂光寺泰園

寂光寺泰園

京 中嶋貞宜

君の心をいかに
思ふ

大坂 宇野河内

君の心をいかに
思ふ

江田 津田通孝

君の心をいかに
思ふ

保良捐東

保良捐東
月一

娘安伯佐留

安伯佐留
月一

也野梨高京

也野梨高京
月一

山濤 秋枝盤

東坡先生詩云
秋風吹木落
黃葉委蒼苔

東 齊川西由

東坡先生詩云
秋風吹木落
黃葉委蒼苔

揚善通寺 公

之日

東坡先生詩云
秋風吹木落
黃葉委蒼苔

蘇軾詩集

同舍書局月九日 蘇軾

謝 南元順

孔子聖賢之書

備錄 一詩軒

詩經一節 蘇軾

大板 玉璽篆文

大板玉璽篆文

休緣 秦一景

休緣秦一景

休緣 玉璽篆文

休緣玉璽篆文

大坂 谷宗也

及在屋宇流世
一の橋組由

徳和 岡村良庵

月一吹雪六 徳次郎 石河屋
岡村

肥後 能一重

及在屋宇流世
一の橋組由

江戸名田未路

江戸名田未路

大坂 新藤玄玄

大坂 新藤玄玄

京 小野玄惠

京 小野玄惠

京 岩井東安

五〇
此は東安の書

江 宮島松

此は宮島の書

京 飯田成彦

此は成彦の書

大坂 爵位

富子 龍心 萬六 三 四

大坂 水師 龍心

龍心 萬六 龍心 萬六 龍心 萬六

大坂 龍心 仙

龍心 萬六 龍心 萬六 龍心 萬六

伏見金枝世

新柯子府自新
乃心橋 友世

伴舟佳田宜直

い
之
五葉乃金く日福世之新
之

大坂 林三親

同和記
林三親

休見 寺門院

松之江の流るる水に

友 藤田章彦

君の如く〜水に流るる水に

和 羽 羽 羽 羽

君の如く〜水に流るる水に

大坂 西田之住

大坂 西田之住

大坂 森田

大坂 森田

親信

和歌 金井

和歌 金井

阿波 棟梨一彦

酒我海軍中務省

紀伊 若山女高田

張母之風流家

張家

大坂 前川幸吉

人月夜之物語

由安

信元 主監 中備

信元 今一箇人、
其後、

信元 延元殿

信元 延元殿、
其後、

信元 主監 坂大

信元 延元殿、
其後、

太極 高木河草子

太極 高木河草子

倭 山田二休

倭 山田二休

江 高井立士

江 高井立士

南都 素門宗行

切通の心は如く酒 宗行

太坂 川端高友

下は心は如く酒 高友

肥前 國經明之

陽梅の心は如く酒 明之

大坂 真石之跡

新刊 真石之跡

紀伊 藤代 石金入

新刊 真石之跡

15

江戸 将宗利

新刊 真石之跡

京都 谷本屋

40

今年 秘 一 門 町 宛

高野山 蓮華寺 市

市 松 口 寄 日 集 言 結 之 必

江户 竹井 利

新 亦 船 如 此 子 之 一 年

月 一 日

蘇 州 江 一 風 子

風 俗 は 蘇 門 外 子

大坂 中 堀 柿 和 軒

京朝江一風子

風は散り白波を吹く

権

大坂中務柿和軒

春風吹く白波を吹く

和

和

和初 金装装面院

春風吹く白波を吹く

和

和

大坂 荻山三郎

K11

此紙は同様に一枚 荻山

後藤 山田竹夫

此紙は同様に一枚 後藤

大坂 武野保後

此紙は同様に一枚 武野保後

全創 中野 中野 中野

京 大井貞雄

秋也中宮之龍宮貞雄

大坂 滝沢宗貞

龍宮中宮之龍宮貞雄

徳前 小原長時

龍宮中宮之龍宮貞雄

京 指谷一 滴

月 主 朝 十 九 日 家 信 師 一 滴

長 門 規 至 紀 書

元 教 主 之 弟 井 邊 氏 規 書

伏 見 栗 田 主 春

主 之 弟 主 健 二 八 日 氏 春 書

王...
...
...

大坂 平山方校

鏡之如曉
...
...

大坂 山城大坂

喜捨...
...

播磨 埴内文云

一...
...

京嶋本正伯

长长

張其成

武初板橋金剛院

卷之五 國之五 花之五

三友西園

三友 王羲之草書

張石之... 三

大坂 井原西彦

品の時... 西彦

堺 藤井徳彦

北条泰成金銀社

大坂 平野仲安

金子... 集

大坂 和氣由貞

初鷹も井の如く 武家 徳兵衛

江々 蝶々子貞宣

新 江戸の如く 蝶々子貞宣

大坂 尾田寛春

江戸の如く 尾田寛春

己酉年九月十三日

盛貞集

己酉年九月十三日
柳式

勝清山口

花朝月令

似船野萩

九月十三日

盛貞集

己酉年九月十三日
似船

江戸 駒井如友

40

秋風をくぐりて

友

大坂 平野治平

此は秋風をくぐりて

友

京 住俊嘉

秋風をくぐりて

友

江一孤影調和

江一孤影調和

江一孤影調和

調和

河内小山日暮重興

河内小山日暮重興

京水村湖春

京水村湖春

大坂 中林素云

古1

地味清一が地味素云

京 田中銀作軒

地味清一が地味素云

大坂 生白庵行風

馬鹿素云が地味素云

馬鹿素云

堦 梓一守

一寄
月夜思
李太白詩
同十四

墮谷半孤軒省我

[Faint bleed-through from reverse side]

用禪場道案京

庚子年
 二月
 廿三日
 庚子年
 二月
 廿三日

松竹梅に元

大坂 和氣遠舟

湖山隱居
 丁巳仲夏
 吳昌碩

京 寺田兵禪

Recd from the Hon. Secy of the Navy

蘇軾詩集卷之四
五言古詩

蘇軾詩集卷之四

蘇軾詩集卷之四
五言古詩

蘇軾詩集卷之四

蘇軾詩集卷之四
五言古詩

蘇軾詩集卷之四

蘇軾詩集卷之四
五言古詩

京 住高政

高政之詩

江 住高政

高政之詩

京 住自悦

自悦之詩

Handwritten signature in Urdu script, likely reading "Muhammad Ali Jinnah".

1845-1846-1847-1848-1849-1850-1851-1852-1853-1854-1855-1856-1857-1858-1859-1860-1861-1862-1863-1864-1865-1866-1867-1868-1869-1870-1871-1872-1873-1874-1875-1876-1877-1878-1879-1880-1881-1882-1883-1884-1885-1886-1887-1888-1889-1890-1891-1892-1893-1894-1895-1896-1897-1898-1899-1900-1901-1902-1903-1904-1905-1906-1907-1908-1909-1910-1911-1912-1913-1914-1915-1916-1917-1918-1919-1920-1921-1922-1923-1924-1925-1926-1927-1928-1929-1930-1931-1932-1933-1934-1935-1936-1937-1938-1939-1940-1941-1942-1943-1944-1945-1946-1947-1948-1949-1950-1951-1952-1953-1954-1955-1956-1957-1958-1959-1960-1961-1962-1963-1964-1965-1966-1967-1968-1969-1970-1971-1972-1973-1974-1975-1976-1977-1978-1979-1980-1981-1982-1983-1984-1985-1986-1987-1988-1989-1990-1991-1992-1993-1994-1995-1996-1997-1998-1999-2000-2001-2002-2003-2004-2005-2006-2007-2008-2009-2010-2011-2012-2013-2014-2015-2016-2017-2018-2019-2020-2021-2022-2023-2024-2025-2026-2027-2028-2029-2030-2031-2032-2033-2034-2035-2036-2037-2038-2039-2040-2041-2042-2043-2044-2045-2046-2047-2048-2049-2050-2051-2052-2053-2054-2055-2056-2057-2058-2059-2060-2061-2062-2063-2064-2065-2066-2067-2068-2069-2070-2071-2072-2073-2074-2075-2076-2077-2078-2079-2080-2081-2082-2083-2084-2085-2086-2087-2088-2089-2090-2091-2092-2093-2094-2095-2096-2097-2098-2099-2100-2101-2102-2103-2104-2105-2106-2107-2108-2109-2110-2111-2112-2113-2114-2115-2116-2117-2118-2119-2120-2121-2122-2123-2124-2125-2126-2127-2128-2129-2130-2131-2132-2133-2134-2135-2136-2137-2138-2139-2140-2141-2142-2143-2144-2145-2146-2147-2148-2149-2150-2151-2152-2153-2154-2155-2156-2157-2158-2159-2160-2161-2162-2163-2164-2165-2166-2167-2168-2169-2170-2171-2172-2173-2174-2175-2176-2177-2178-2179-2180-2181-2182-2183-2184-2185-2186-2187-2188-2189-2190-2191-2192-2193-2194-2195-2196-2197-2198-2199-2200-2201-2202-2203-2204-2205-2206-2207-2208-2209-2210-2211-2212-2213-2214-2215-2216-2217-2218-2219-2220-2221-2222-2223-2224-2225-2226-2227-2228-2229-2230-2231-2232-2233-2234-2235-2236-2237-2238-2239-2240-2241-2242-2243-2244-2245-2246-2247-2248-2249-2250-2251-2252-2253-2254-2255-2256-2257-2258-2259-2260-2261-2262-2263-2264-2265-2266-2267-2268-2269-2270-2271-2272-2273-2274-2275-2276-2277-2278-2279-2280-2281-2282-2283-2284-2285-2286-2287-2288-2289-2290-2291-2292-2293-2294-2295-2296-2297-2298-2299-2300-2301-2302-2303-2304-2305-2306-2307-2308-2309-2310-2311-2312-2313-2314-2315-2316-2317-2318-2319-2320-2321-2322-2323-2324-2325-2326-2327-2328-2329-2330-2331-2332-2333-2334-2335-2336-2337-2338-2339-2340-2341-2342-2343-2344-2345-2346-2347-2348-2349-2350-2351-2352-2353-2354-2355-2356-2357-2358-2359-2360-2361-2362-2363-2364-2365-2366-2367-2368-2369-2370-2371-2372-2373-2374-2375-2376-2377-2378-2379-2380-2381-2382-2383-2384-2385-2386-2387-2388-2389-2390-2391-2392-2393-2394-2395-2396-2397-2398-2399-2400-2401-2402-2403-2404-2405-2406-2407-2408-2409-2410-2411-2412-2413-2414-2415-2416-2417-2418-2419-2420-2421-2422-2423-2424-2425-2426-2427-2428-2429-2430-2431-2432-2433-2434-2435-2436-2437-2438-2439-2440-2441-2442-2443-2444-2445-2446-2447-2448-2449-2450-2451-2452-2453-2454-2455-2456-2457-2458-2459-2460-2461-2462-2463-2464-2465-2466-2467-2468-2469-2470-2471-2472-2473-2474-2475-2476-2477-2478-2479-2480-2481-2482-2483-2484-2485-2486-2487-2488-2489-2490-2491-2492-2493-2494-2495-2496-2497-2498-2499-2500-2501-2502-2503-2504-2505-2506-2507-2508-2509-2510-2511-2512-2513-2514-2515-2516-2517-2518-2519-2520-2521-2522-2523-2524-2525-2526-2527-2528-2529-2530-2531-2532-2533-2534-2535-2536-2537-2538-2539-2540-2541-2542-2543-2544-2545-2546-2547-2548-2549-2550-2551-2552-2553-2554-2555-2556-2557-2558-2559-2560-2561-2562-2563-2564-2565-2566-2567-2568-2569-2570-2571-2572-2573-2574-2575-2576-2577-2578-2579-2580-2581-2582-2583-2584-2585-2586-2587-2588-2589-2590-2591-2592-2593-2594-2595-2596-2597-2598-2599-2600-2601-2602-2603-2604-2605-2606-2607-2608-2609-2610-2611-2612-2613-2614-2615-2616-2617-2618-2619-2620-2621-2622-2623-2624-2625-2626-2627-2628-2629-2630-2631-2632-2633-2634-2635-2636-2637-2638-2639-2640-2641-2642-2643-2644-2645-2646-2647-2648-2649-2650-2651-2652-2653-2654-2655-2656-2657-2658-2659-2660-2661-2662-2663

中國銀行

京 中場五流

勝 五流中場京

堺 細川成政

成政 細川氏

京 伊藤信清

信清 伊藤氏

江戶時代の書道

大坂 樋口如見

三才図會

京 葉分軒

三才図會

大坂 幸鈴軒

三才図會

東京 西武百貨店

10

東京 西武百貨店
10月 2日

東京 西武百貨店

東京 西武百貨店
10月 2日

東京 西武百貨店

東京 西武百貨店
10月 2日

Handwritten text in cursive script, likely a signature or calligraphy, written in black ink on aged paper. The text is oriented horizontally and appears to be a single line of writing.

市中之人

太極 歸一得

日月星辰

養德 居困

之在天下

太極 觀心

如夢如幻

庚子年
 庚子年

二京前閑白康道云

乃翁作書無所不工

西山亭圖

卷之五
 五言古詩
 五言律詩
 五言絕句
 五言排律
 五言長句
 五言歌行

也。家之中。通。二。三。四。五。六。七。八。九。十。十一。十二。十三。十四。十五。十六。十七。十八。十九。二十。二十一。二十二。二十三。二十四。二十五。二十六。二十七。二十八。二十九。三十。三十一。三十二。三十三。三十四。三十五。三十六。三十七。三十八。三十九。四十。四十一。四十二。四十三。四十四。四十五。四十六。四十七。四十八。四十九。五十。五十一。五十二。五十三。五十四。五十五。五十六。五十七。五十八。五十九。六十。六十一。六十二。六十三。六十四。六十五。六十六。六十七。六十八。六十九。七十。七十一。七十二。七十三。七十四。七十五。七十六。七十七。七十八。七十九。八十。八十一。八十二。八十三。八十四。八十五。八十六。八十七。八十八。八十九。九十。九十一。九十二。九十三。九十四。九十五。九十六。九十七。九十八。九十九。一百。

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

مجلسه ۱۲۸۳

元祿十二^{庚辰}陽月己酉 從弟吳禮

第 二 十 一 回
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

東極星安宮殿

Mt. St. John's - Mt. St. John's

公尹信殿衛迎

此
 卷之五

青蓮院殿尊院親王

常事并云也

天竺山房

信之題

天竺山房

京都府立美術館

天竺山房

天

蘇軾詩集卷之八

蘇軾詩集

蘇軾詩集卷之八

蘇軾詩集

蘇軾詩集卷之八

北穀山無量壽院

北穀山無量壽院

八

北穀山無量壽院

北穀山無量壽院

北穀山無量壽院

北穀山無量壽院

北穀山無量壽院

北穀山無量壽院

強行不能隨意

三才學士全集 卷之三

孝友傳

孝友傳 卷之三

孝友傳 卷之三

孝友傳 卷之三

東 漢 書

東 漢 書 卷 之 九

心 信 仁 上 卷

心 信 仁 上 卷

婦 孺 定 音

婦 孺 定 音 卷 之 一

大坂七年伯貞

大坂七年伯貞

平野伯貞在室

大坂七年伯貞
梅乃之孫

平野伯貞

大坂七年伯貞

大坂

卷之五

部
子
雨
丹
入
心
部

Handwritten signature: *James B. Smith*

心跡を明かにす

石丁齋宗後記

۱۵۵

五ノ
二ノ
三ノ
四ノ
五ノ
六ノ
七ノ
八ノ
九ノ
十ノ

五ノ

五ノ

五ノ

五ノ

大坂 伊勢村 以良

九四

経冊や柳花變のひかりを

城おし川安未

袂よりけしきり目し清くさるる雲 云未

依見任中野一直

おし乃せわを望むは雲よりさるる雲 一直

東江集卷之七

東江集卷之七

東江集卷之七

東江集卷之七

東江集卷之七

東京華僑

一、東京華僑之代表

東京華僑代表

東京華僑代表之代表

東京華僑代表

元日

東京華僑代表之代表

大坂平泉

九八

御書
大坂平泉

大坂平泉賀子

蘭都

子

大佛乃胸
御書
大坂平泉

信丹康宗院

御書
信丹康宗院

信丹

糸妙海寺系桂

万葉に生るる筆や夕時を
系桂

脛所正智月

みよにかはへんきうり

けしの花 智月

大坂在処系桂

雲乃目ハ学寮あふぬ宮もは
系桂

八月廿九日

梅

海潮志

九月廿九日

大坂園

九月廿九日

九月廿九日

一 卷 之 三

京 師 書 院

東 坡 詩 集 卷 之 三

東 坡 詩 集

東 坡 詩 集 卷 之 三

東 坡 詩 集 卷 之 三

東 坡 詩 集 卷 之 三

大觀元年

雅宜堂

張氏

張氏

張氏

張氏

蘇軾詩集卷之四

蘇軾詩集卷之四

蘇軾詩集卷之四

第三回

山崎闇斎の書

口十

山崎闇斎

山崎闇斎の書

山崎闇斎

山崎闇斎の書

歌都之風之紀分梅吟

大板起近

山風王松之風之紀分梅吟

東山起近

山風王松之風之紀分梅吟

金剛般若心經

卷之三

次觀心經

卷之三

凡觀心經

張國良題詞

慶豐公司一周年紀念

張國良題詞

慶豐公司一周年紀念

張國良題詞

慶豐公司一周年紀念

新刊 日本書紀 卷之四

新刊 日本書紀

新刊 日本書紀 卷之四

新刊 日本書紀

新刊 日本書紀 卷之四

新刊 日本書紀

新刊 日本書紀 卷之四

東松浦唐寧

[illegible]

場溪亭

此乃一可村

沈氏之

是純
之
福

東京府知事

東京府知事 東京府知事

東京府知事

東京府知事 東京府知事

東京府知事

東京府知事 東京府知事

蘇軾詩集

蘇軾詩集卷之五

蘇軾詩集

蘇軾詩集卷之六

蘇軾詩集

蘇軾詩集卷之七

蘇州府志

卷三 藝文

詩
卷之三
詩
卷之三
詩
卷之三

卷四 藝文

詩
卷之四
詩
卷之四
詩
卷之四

卷五 藝文

詩
卷之五
詩
卷之五
詩
卷之五

東 山 風 光 記

東 山 風 光 記

大 江 國 風 記

大 江 國 風 記

東 山 風 光 記

東 山 風 光 記

東河上集

東河上集

東水閣集

東水閣集

東山集

東山集

東 中 巻

11回

斗心大行法親王

大坂 庭屋 巻

志んくも 中 巻

江 若 巻 一 冊

江 若 巻

江 若 巻

江 若 巻

一 冊

客問之曰月已好里子柳水

京井友房

夏月此好里子柳水

京作木匠

主心好里子柳水

石川海山

石川海山先生

東海詩集

東海詩集
卷之九
目次

大坂海山

目次

張氏家譜之序

卷一

年之譜之序

京都府立総合資料館

112

京都府立総合資料館

京都府立総合資料館

京都府立総合資料館

京都府立総合資料館

京都府立総合資料館

京都府立総合資料館

宋 蘇軾 蘇軾

蘇軾 蘇軾 蘇軾 蘇軾 蘇軾

宋 蘇軾 蘇軾

蘇軾 蘇軾 蘇軾 蘇軾 蘇軾

宋 蘇軾 蘇軾

蘇軾 蘇軾 蘇軾 蘇軾 蘇軾

月 念 之 一 飛 飛 作 之 也

深 思 之 也 一 如 記 夢 雲

生 之 今 明 福 壽 之 澤 也 直 觀

用其不種

北田の地を以て
日之出の地

是地自種

是地自種
月之出

論智事集

是地自種

東島地蔵堂

1111

有 我 佛 心 淨 土 經 卷 第 一

大正 寺 作 家 蓮

凡 一 切 世 間 法 無 常 變 壞 無 所 依 歸

大正 寺 作 家 蓮

枯 木 一 枝 石 上 坐 雲 間 一 片 心 淨 土 經 卷 第 一

大正 寺 作 家 蓮

卷之三 雜著

東國風物

花鳥蟲魚

俗語

風土人情

雜著

卷之三 雜著

花開院記

花開院記 花開院記 花開院記

花開院記

花開院記 花開院記 花開院記

花開院記

花開院記 花開院記 花開院記

大德寺文書

大德寺文書
大德寺文書

大德寺文書

大德寺文書
大德寺文書

大德寺文書

大德寺文書
大德寺文書

李 望鳳 畫

謝安石

東 勝 音 光 石

吳昌碩

大坂市東區

此
 卷
 之
 一
 也

文好何如

蘇東坡先生集

首子以文爲此篇

作冊上卷

如月也

大坂 水島園米

支那 — 米穀 在 如 此 之 境

實 況

大坂 江戶南白

江戶 米穀 在 如 此 之 境

南 白

東京 米穀 在

東京 米穀 在 如 此 之 境

康村下京

康村下京

一決倫之

一決倫之

平家路高坂

平家路高坂

大坂の御寺

白梅の香

大坂の御寺

波の記

大坂の御寺

徳

大坂の御寺

丁

進行文

11111

清一校中清
大町町

大町町

大町町

越前町

夏夜

普田

11111

愛國愛家

人生如夢一轉眼 萬事皆空

大坂 坂東春雄

津國津龍
惠尔天

牛車馬車波行國院石車來辭

東京 富士山

鐵馬走非風 油燈風雲 谷

東遊記解春元

送王叔元加^學歸^下 卷九

文叔住^氏并^氏廿二

拾遺^氏之^氏歸^氏并^氏廿二

守^氏并^氏廿二

守^氏并^氏廿二，朝^氏守^氏并^氏廿二

大坂 野郎 晴虎

1114

晴虎 大坂 野郎 晴虎

大坂 野郎 晴虎

晴虎 大坂 野郎 晴虎

大坂 野郎 晴虎

晴虎 大坂 野郎 晴虎

三張
此乃
心經

信佛者及

心經
初二

信佛者及

心經
初二

大坂村記

眼打通乃 一礼

大坂村記

部公家大坂村記

大坂十方萬天聖

部公

百一萬天聖

部公

好夢常來

好夢常來心自安

好夢常在行可常

好夢常在行可常

好夢常來

好夢常來心自安

東坡新聲

110

此世之好地也
伊谷文

大坂極盡舍羅

此世之好地也
伊谷文

東坡常記

此世之好地也
伊谷文

常記

六叔師松録

平聲門註

此後亦無

思道先生遊女門書

大坂元吉堂

卷之四
 卷之四

家馬流藏士

此之書乃家馬流藏士
家馬

大坂名松豐流

春之風神乃林一梅松
名松

家馬流藏士

此之書乃家馬流藏士
家馬

京橋 重國

京橋 重國

伯耆 佐荒尾 真文

伯耆 佐荒尾 真文

大田 重文

大田 重文

正春由是

此乃一氣之流

地乾乾大

此乃一氣之流

九指上臨

此乃一氣之流

奥州公慶三

奥州公慶三
奥州公慶三

奥州公慶三

奥州公慶三
奥州公慶三

奥州公慶三

奥州公慶三
奥州公慶三

みづうみ... かき草

京都に種家

ゆー... 浦子鳥種家

大坂... 智徳

名初... 種家

江戸に種家

清... 種家

京三民三書

若美林集知方 國信

京山本養

若美林集知方 養

大坂安樂寺方

若美林集知方 保

大坂佐倉笑種

おのてあはれうづりある
水あ 笑種

作丹森が百九

おのてあはれうづりある
(笑) 笑種

東市村好々

おのてあはれうづりある
山乃 笑種

文部省 庶務課

文部省 庶務課 庶務課長 殿

紀伊半島 長

紀伊半島 長 殿

文部省 庶務課

文部省 庶務課 庶務課長 殿

此後必能大顯身手

此後必能大顯身手

此後必能大顯身手

此後必能大顯身手

此後必能大顯身手

何の如く

何の如く

何の如く

何の如く

何の如く

何の如く

春風集

春風集

春風集

春風集

春風集

春風集

蘇子瞻記

蘇子瞻記

蘇子瞻記

蘇子瞻記

蘇子瞻記

蘇子瞻記

不刊之石

不刊之石

不刊之石

不刊之石

不刊之石

不刊之石

高林尔格

一五六

高林尔格

高林尔格

高林尔格

高林尔格

高林尔格

宣其年

春風吹綠柳

好年好景

好年好景好年好景

好年好景

好年好景好年好景

自來水

自來水

自來水

自來水

自來水

自來水

八坂後表巻五

新編後表巻五

新編後表巻五

新編後表巻五

新編後表巻五

新編後表巻五

大坂市南區

大坂市南區
大坂市南區
大坂市南區

大坂市南區

大坂市南區
大坂市南區
大坂市南區

大坂市南區

大坂市南區
大坂市南區
大坂市南區

世傳詩作墨書

此心無物
如雲如水
如風如月
如日如星

世傳詩作墨書

此心無物
如雲如水
如風如月
如日如星

世傳詩作墨書

此心無物
如雲如水
如風如月
如日如星

東 北 風 雲

1411

東 北 風 雲

東 北 風 雲

東 北 風 雲

東 北 風 雲

東 北 風 雲

東 北 風 雲

東 北 風 雲

齊心之節ふたれはのち 想ふ

京中野仲昔

玉露を沙に散らす事 仲昔

停丹上佛兒

佛兒
秋風同飲心
停丹上佛兒

停丹上佛兒

秋風同飲心
停丹上佛兒

停丹上佛兒

秋風同飲心
停丹上佛兒

自來水公司

五音部

生冠

奉納花名

敬啟

京要部

花王

同治壬午年

同治壬午年

同治壬午年

傳列鑑手師諧誹

諫鼓苔むして驚ぬ鳥の跡絶さる俳諧に目をふれこ
ろを悦しむる輩古今多しといへとも筆蹟いつれ
と知かたしこゝに古筆治平自眼をもつて其徳其名
世にみてる作者集をかれしを望寫是を種として其
外國々所々に所持いたされしを尋もとめ凡貳百四
十六枚なき跡のかたみにもやと梓にちりはめ侍る
又若竹のふしゝ世にうたふ人濱の眞砂の數ゝ
なれはしるしかたしなを拔出たるたかむなは後人
の選をまてるものならし

大坂松壽軒

井原西鶴

永鶴

延寶四_{丙辰}陽月廿五日

伊勢 荒木田守武

千句一飛梅やかろゝしくも神の春

いせ山田 守武

伊勢内宮の神主。正四位上荒木田氏國田長官と號す。宗祇宗長周桂等に連歌を學ぶ。大永五年十月庚申の夜一首毎に『世の中』の三字を取入れし教訓歌百首を詠す。世に『世の中百首』或は『伊勢論語』と稱す。天文九年の冬創めて俳諧連歌の獨吟千句をものし後世俳諧の祖と仰がる。此「飛梅や」の句は其獨吟千句第一の立句なり。天文十八年八月八日歿享年七十七。
辭世「あさがほにけふは見ゆらん我世かな」

山崎 一夜庵宗鑑

滿まるに出てもななき春日哉

宗鑑

支那氏名は範重、俗稱は彌三郎。近江の人。幼時好學の若き將軍足利義尙(九代)の侍童たりしが、延徳元年廿五歳の時義尙が陣中に急歿するや無常を感じて落飾し、名を宗鑑と改め、攝州尼ヶ崎に居を定めて一休和尚に參禪す。明應年間攝津山崎巷關戸の院の傍に閑居して専ら俳諧を修す。故に世に山崎の宗鑑を以て稱す。後讃岐七寶山興昌院境内なる一夜庵に起臥する事二十六年、天文二十二年十月二日此の地に歿す、享年八十九。京都天瑞寺に墓あり。著書としては、俳書の嘴矢と稱せらるゝ『新撰犬筑波集』(永正十一年編)あり。
辭世「古今夷曲集」卷第九に「背に癩瘡出來て身まかる時よめる宗鑑はどちへと人のとふならばちとようありてあのよへといへ」

烏丸 大納言光廣公

寛十二試見
元日丑也 空に今朝ねりいつる牛のはるひ哉

黄

烏丸氏。正二位權大納言。歌學を細川幽齋に學んで奥祕を極む。
寛永十五年七月十五日歿、年六十。

京 逍遊軒松永貞徳

あめてたやふれは草木もよひの年

長頭丸

松永氏、幼名勝熊、松永彈正永種の子。壯歳薙髮して松友と號し軒を逍遊と名づく。此の外柿園、芦丸屋、明心居士等の號あり。又晩年髻を束ねて童服を着し、自ら呼んで長頭丸又は延陀丸と云ふ。歌道を玄旨法印(細川藤孝)に、連歌を里村紹巴に學んで貞門俳諧の祖となれり。守武宗鑑の後を受けて絶えんとしたる俳道に灯を点じ、連歌の式目を基として俳諧の法式を定めたる「御傘」を撰したる事は彼の一大事業なり。初め京三條大路に住し、後五條松原の北東洞院の東に移り住す。勅賜に依つて花咲舎と號す。承應二年十一月十五日歿、行年八十三歳。洛南上烏羽實相寺に葬る。

著書 俳諧御傘、淀川、油かす、百韻自註、五條百句、天水抄、紅梅千句等。
辭世「露の命きゆる衣の玉櫛笥ふたゝびうけぬ御法なるらむ」

越前 本勝寺日能

春たつといふはかりにやかさり繩

日能

越前の人敦賀本勝寺十三世住職。夙に貞徳の教を受けて秀吟多し。
寛永六年十一月京都妙滿寺に於て山本西武が百韻俳諧を興行したる際も連座せり。承應元年寂。

京 誓願寺安樂庵

山風の吹口とちよかはさくら

策傳

策傳本姓平林、通稱は平太夫。京都誓願寺中竹林院の住僧にして醒翁と號す。金森宗和に茶道を學び、世に稱する安樂庵の習は此人より出づ。頗る頓智に富み、滑稽諧謔をよくし、常に諸侯の會席に招かれて座興を助け、殊に豐太閤の寵を受く。晩年耳を聾し、筆を以て口舌に代ゆ。曾呂利新左衛門と同席の折は、新左衛門の狂歌に對して策傳これに笑話を附して興じたる事「瀬貞筆記」に見ゆ。元和の頃、板倉重宗の請により笑話を集めて「醒睡笑」八卷を著す。後世此の人を以て落語家の祖となす。寛永十九年正月八日歿、年八十九。

大坂 津田 休甫

花の雲富妻那もえやは夕嵐

休甫

本姓宇喜田氏、江齋と號す。大坂生玉に住す。貞徳門にして、俳諧自ら一風あり、性不羈磊落の一奇人にして、元祿の惟然坊に彷彿たるものあり。明暦の頃、六十三にして歿す。

辭世「我命とはゞ七九の鐘撞木杖金はもたても南無阿彌陀佛」

京

野々口松翁

鹿ををふ獵師となるやさくら狩

立 圃

野々口氏名は親重、通稱雛屋庄右衛門(又は市兵衛)立圃(一世)と號す。

別に松翁、拓翁の號あり。丹波の人、京都に住す。弱冠より智力衆に秀で、紫女の源語を好んで讀む。一年、松江重頼と論争の事ありて師貞徳の許を退き、後烏丸光廣の學窓に參じて一流の祖となる。畫を能くす。寛文九年九月晦日歿、年七十一。京寺町要法寺に葬る。

著書

花火草、徳萬歳、若きつね、片輪車、花月千句、歸花千句、阿太花千句、筑子千句、碁打花見、河ふね、江戸むらさき、硯はいかい、老鳥千句、空つぶて、追善九百韻、都萬句、すりひうち、人眞似、九曲折花鳥千句、休息哥仙、鶉鷺千句、袖中記、美濃郡三十六禽句合、明鑑源氏繪鈔等。

辭世

月はなの三句目を今しる世かな

同

松江維舟

下戸衆や胡椒丸呑花見酒

重 頼

維舟松江氏名は重頼、通稱は大文字屋治右衛門、貞徳門、京都の人、旅宿を業とす。腐誹子、乳父子、自江翁等の號あり。法橋に叙せらる。性剛直にして誤を見て止まる事を得ず、これに因りて友人と交りを斷つこと多し。野々口立圃との論争により貞徳の許を退き、里村懷惠菴の門に入りて連歌を學び、一流を立つ。延寶八年六月廿九日歿、年七十四歳。京都東山大谷に葬る。

著書

犬子集、毛吹草、梅千世菊千代、懷子、時世粧、名取川、佐夜中山、大井

川、溜池河御座、武さしの浮世なぎなた等。

辭世 林禽もや菩提樹のたつまくむ清みづ

江戸 齋藤徳元

おちやかしら夏の初花遅櫻

徳 元

齋藤氏名は利起、通稱齋宮。貞徳門(或は友人とも云)濃州岐阜の人、織田信秀に仕へ、後薙髮して徳元と號す。又帆亭の號あり。江戸馬喰町二丁目(或は江戸町とも云)に住し、寛永十八年「誹諧初學抄」を刊行す。これ江戸に於て俳書を板刻したる初めなり。

高名年表大成には正保四年八月廿八日丹後に歿し、享年八十九、天橋立智恩寺に葬ると云ひ、俳諧兩面鏡には正保元年に歿すとあり。法名齋入。

辭世 今まではいきたは事を月夜かな

大坂 天満花島坊

われか身や心の月の影法師

空 存

大坂天満川崎街川崎坊の住僧。松江重頼門。(或は友人なりとも云)寛文年間歿。『後撰夷曲集』卷第九に「空存追善」として、名斗をこゝにのこして本國にかへるや地水火風空存 重信とあり。行年詳ならず。

著書 夢見草

平野 末吉道節

うす霧やむかしの京の引残し 道節

末吉氏名は増則、通稱源太郎、道節は晩年の名なり。攝州平野の人。貞徳門。寛永年中、徒然草成親僧都の事により、もしあらば雪女もや白うるりといふ秀吟を吐てより、世に白禹流里の道節と云ふ。又西武の『鷹筑波集』刊行に力を借したりと云ふ。承應三年八月十二日歿、年四十七。

京 織筵齋春可

松に藤かゝるめてたき齡かな 春可

姓氏不詳。朝生軒とも號す。松江重頼の高弟にして、寛永年中夭折せしを以て多く知られず。

京 江崎幸和

はゝかりや天を下目に水の月 幸和

江崎氏、通稱太左衛門、京都の人、落飾して春學又一翁と號す。俳諧を野々口立圃に學ぶ。醫を業とす。性甚だ酒を好み、或年酒店の催促を受けて拂ふべき財なく、一首を詠じてその下僕に渡す、その歌に、五月雨や天のさかてにふりつまり雨のあしほどうかうわめいはく此の事、淺井了意作、狂歌はなしに見えたり。萬治三十六俳仙の一人。歿年不詳。著書 若付底ぬけ白。

伏見 西岸寺

秋風や月宮殿の修理亮 任口

伏見西岸寺三世寶譽上人、如羊と號す。歌道に達し連俳を能くす。里村昌程の門人なりといふ。俳道は松江重頼に隨ふ。歿年不詳。『續虛栗』貞享四年刊に、新年の御慶とは申けり八十年の吟あり。

京 北村拾穂軒

さきちやうにほこらすわらやひの袴 季吟

北村季吟、通稱久助、湖月齋、七松子、蘆庵と號す。貞徳の門。父は宗龍と云ひ、連歌香道を能くし、醫を以て業とす。江州北邑の人なり。初は京都山伏町に住し、後新玉津島社中に居る。晚年台命に依り東武に參仕し、國學博士、法印に叙せられ、再昌院と號す。幕府の歌學所となり、五百石を賜ふ。弱冠より國史歌集を熟覽し、殊に源氏物語に通じ、著す所の『湖月鈔』後世に名高し。芭蕉素堂、元隣等皆此の門に出づ。寶永二年六月十五日歿。年八十二。下谷池ノ端正慶寺に葬る。

著書 山の井、増山の井、師走月夜、花千句、龜集、埋木、新續犬筑波、十會集、哥仙發句、二十會集、續連珠、三物記、俳諧合、室吟百韻等。

攝州山田 加藤盤齋

枕してこれに初音や時鳥 磐齋

加藤氏名は等空、通稱濱五郎、臨淵、冬木齋と號す。貞徳門。國學に精

通す。延寶二年八月十一日歿、年五十四。

江戸 石田 未得

あひぬれは今肌涼しなけれ川 未得

石田氏、通稱又左衛門、乾堂異庵と號す。江戸の人、故ありて相州に隠れ、後再び江戸神田鍋町に住して未得と改む。後京に上つて難冠井令徳に親み、貞徳の門人となる。俳諧のみならず狂歌をもよくし、吾吟我集、最も名高し。寛文九年七月十八日歿、年八十餘歳。淺草誓願寺に葬る。

堺 半井 慶友

これそこのつもれはひとつ老の春 慶友

半井氏又溫野氏宗松、卜養と號す。云也の男。堺の人、江戸住。寛文六年幕府の醫官となり法眼に叙せらる。貞徳門。延寶六年十二月廿六日歿、年七十二。

堺 高瀬 侘心子

ひとり寝もはたやあみすく紙ふすま 梅盛

高瀬氏、通稱太郎兵衛、侘心子と稱し、落飾して宗入居士と號す。京二條油小路の人。貞門七俳仙の一人。元祿十四年歿。年八十三。著書 口眞似草、鶯鵲集、捨子集、山下水、七十二物争、便船集、類船集、古かゝ見、木玉集、さゞれいし、落總集、道連集等。

和彛郡山 池田 正式

老か身のしろせめよするせいほ哉 正式

池田氏、通稱重郎右衛門。大和郡山城主本多政勝に仕ふ。初め貞室に隨ひ、後貞徳直門となる。狂歌をもよくし、布留田造平郡實梯の名を以て物せるもの萬載狂歌集等に見ゆ。寛永の頃松江重頼、毛吹草、正保二年刊を撰する時、正式の句、庭訓は春のはじめの試筆かなを卷頭に置かん事を約しながら、己が門下春可の句、鶯も歌機嫌なり今日の春を以て之に代へたり。正式之を見て違約を憤り、氷室守正保三年刊四卷を著して、毛吹草を完膚なきまでに難詰し、重頼を罵倒せしかば、重頼大いに怒り、正式に果し状を送りしが、正式罪を謝し、別に二心あるに非ず其の證として愚句二百添削に参らすと誓詞を添へて飛脚を遣したるを以て重頼も心を解きたりと傳へらる。同じく正保三年板の俳諧古保里も、毛吹草を難じたる書にして、編者の名を明にせざれども池田正式の作れるものなりと傳へらる。歿年不詳。

泉彛岸和田岡部 元綱

口あけてむまの年みる曆哉 もと綱

岡部氏、通稱十左衛門、岸和田の人、或は江戸の住ともいふ。「新百人一句」の一人。重頼門。

大坂 小瀬 民部

香のたねはやわらす花の本

小瀬氏、大坂、通稱民部、香のたねはやわらす花の本、寛文三年三月廿二日歿、年六十五。

京 中井 正直

池にはる水は魚の目かぬ哉 正直

中井氏、京、通稱正直、池にはる水は魚の目かぬ哉、大正十一年歿。

大坂 小濱民部殿

哥のたね枕やわらす花の本 嘉隆

小濱氏大坂御船手五千石を領す。寛文四年三月廿三日歿、年六十五。

紀 嘉 若山宗明

とかぬまの鹿子歟し、の腹籠 宗明

板原氏通稱三郎兵衛貞徳門和歌山の人寛永年中。

京 馬淵宗畔

染つけて花野やうつす桔梗さら 重治

馬淵氏名は重治通稱詳ならず。京都の人貞徳門。性閑雅にして言語少し。承應四年歿。

天王寺 夕陽庵以春

昔くある所にや空の月 道寸

八丈氏通稱奈良屋嘉右衛門。はじめ弘永と號す。泉州堺の人、後大坂天王寺村に居を卜して道寸と改む。重頼の門なれども、晩年師風を變じて異體を吟ず。或は重頼の友なりとも云ふ。歿年未詳。
著書 獨吟集。

京 中井正直

池にはる氷は魚の目かね哉 正直

中井氏又鈴木氏通稱平野屋重兵衛貞徳門京都の人。犬子集に入選す。

京 萩(萩野)安靜

爰も姥か懷に遊ふかこ雪哉 似空

萩野氏名は重知通稱九郎兵衛似空又は似空軒と號す。貞徳門。寛文九年歿。

著書 介不廻細布鄙諺集如意寶珠。

堺 柏井一正

見てや啼あしき夢野、しかめつら 一正

通稱多左衛門、一松と號す。泉州堺の人。貞徳門。歿年不詳。

八幡山 豐藏坊

茶の色や青のりときし寺候な 信海

山城八幡豐藏坊住職名は孝雄、牛庵、玉雲子の號あり、松花堂流の書及茶道、狂歌をよくす。元祿元年九月十三日歿、年五十四。

堺 正法寺成安

花は晝もあふなき風の扇子哉 成安

泉州堺北ノ庄正法寺の住職。法名不詳。初め慶友を師とし後貞徳の教を受く。三十六誹仙の一人。歿年未詳。

著書 うづ見草

辭世 親もなし子もなし跡に金もなしからだ斗りはからりちむなり

丹波(桓)柏原女ステ

染川と紅葉にいはんたつた河 ステ

田捨女丹波國氷上郡柏原の人田氏の女。弱年より和歌俳諧を好み、北村季吟の門に入る。後貞徳門の宮川松堅に屬して和歌を學ぶ。宗族田義園に嫁して壯齡寡婦となり、落飾して妙融と號す。はじめ淨土律を學び、後正眼國師に參禪し、播州網干の邑に一草廬を創して不徹菴と號す。元祿十一年八月十日此の庵に寂す。壽六十五。女六歌仙の一人なり。現樞密顧問官田健治郎男はその後裔なり。

岩城 内藤左京殿

かさり松や今朝神代のまき柱 風鈴子

内藤氏、左京亮、名は義泰、幼名萬菊、初め頼長又義概。風鈴軒、白藤子、紫硯、風虎等の號あり。磐城平の城主。後從四位下に叙し、左京太夫と改

む。西山宗因門。露沾の父。貞享三年五月二十九日歿年六十七。著者 夜のにしき、櫻川、信夫の浮島さゝら川等。

大坂 松山玖也

中綿やとつてはしまる夏衣 玖也

松山氏名字詳ならず。磐城の人、大坂に住す。初め季吟に學び後宗因門に入る。延寶元年四月歿。

著書 續獨吟集

廣嶋 中川喜雲

うはさしや月の弓いるうつほ草 喜雲

中川氏、名は重治或は重徳と云ふ、通稱吉左衛門、落飾して喜雲と改め、山櫻子と號す。廣島の人、安原貞室の門。嘶本の作者としても名高く、その著、私可多話、寛永十一年刊、五卷は斯道の權輿なり。寶永二年十月三日歿、享年七十。

著書 京わらべ、鎌倉名所記、跡追都案内者等。

土佐 圓満寺皆虛

人は肚年は頭のむつき哉 皆虛

土佐國圓満寺の住職、角茄軒と號す。歿年未詳、延寶の末年頃と推せらる。

著書 世話體草、四名集

土佐 富永燕石子

花にくむは壺前栽歟源氏酒 燕石

富永氏通稱治右衛門貞徳門。
著書 牛飼集

伊勢 山田光貞

残りぬる雪に蕨やぬき入手 光貞

杉木氏通稱赤右衛門。美津女の夫。伊勢山田の人。犬子集入選者。

京 福井知徳

山風のいそけはまはる時雨哉 知徳

福井氏通稱長右衛門初名來徳。京都の人。野々口立圃門下の高才。
歿年未詳。

紀伊 若山定時

火をともし風の手をやく花もかな 定時

太田氏通稱太兵衛。紀州和歌山の人。貞徳門。歿年未詳。
著書 塵囊集

大坂 水野榮甫

花盗む主やいき云鞍馬山 榮甫

水野氏。梅吟子、榮甫と號す。廣島の人、大坂住。延寶年中。

江戸 昌雲軒春清

花ならで草に火ともす螢哉 昌雲

井上春清通稱次左衛門、昌雲軒と號す。京都住、立圃門。玉海集及新續犬筑波集に秀吟多し。明暦元年歿(或は承應四年の説あり)

著書 鹿驚集、千句。

津國 勝尾寺義空

露にうつる月や千種のうすめかね きくう

攝津勝尾寺の住僧。

讃岐 岩手宗也

鶯は句ひの花の前句哉 宗也

岩手氏。名は英方、次左衛門と稱す。讃岐生駒藩士藩中唯一の歌人たり。里村昌琢門。生駒家斷絶後相州小田原及江戸住、寛永末年歿。

豊後 大村因幡殿

餅月の光は氷砂糖哉 一風

大村氏豊後の人。

大坂 天満蔭山休安

金衣鳥の翅や經の袖表紙 休安

影山氏名は文明通稱七郎左衛門貞徳門大坂の人。歿年未詳。

和邇 前清淨院

鼻柱かふるな月の白鼠 哥慶

大和清淨院の前往寛文年中。

京 伊藤則常

頭巾柿もしくはれに色や染かくた 則常

伊藤氏京都の人。

伊勢 山田正友

すはや月東西く四方の雲 正友

遠藤氏伊勢山田の人。杉田望一の弟。加友及宗因門。後江戸に出

で、田代松意と共に江戸檀林を創設す。

大坂 川崎宗立

秋鹿のよる笛の音や想夫戀 宗立

川崎氏名は友直通稱源左衛門落飾して宗立と號す。浪花の人。始め貞徳に隨ひ後立圃に屬す。歿年不詳。

京 内田平吉

香や知るへすいあてに折雪の梅 平吉

内田氏。順也と號す。梅盛門。京都の人。五節句の著あり。

越前 林御門跡

樂なれや代も太平の今朝の春 林

福井本淨寺住名は光恕光悉法名昭圓。西本願寺十四世准如の七子。

季吟門。

京 青地可頼

賑ふや菖蒲のほりに町くたり 可頼

青地氏通稱市郎右衛門。貞徳門。京都の人。歿年不明。

泉州堺 盛之

御神樂やもよほす 焔の 蜚 盛之

泉州堺の人。

京 符類屋政信

餘の花に是やましての 翁草 政信

符類屋氏。京都の人。

江戸 尾關乘言

ぬす人におい風もよき 花香かな 乘言

尾關氏通稱長右衛門、江戸の人。立圃門。歿年不明。

備前 岡本胤及

ちる花もまててふや 菊の霜掩ひ 胤及

岡本氏通稱仁意。備前の人、醫を業とす。初め貞徳に屬し、後季吟の門に入る。延寶四年歿。

著書 鮑屑、角柱、千句、風俗通。

京 渡邊氏重

雪ふれは木毎に 餅のなる世哉 氏重

渡邊氏通稱吉兵衛。京都の人。貞徳門。歿年未詳。

伊勢 山田孝晴

一聲は驚もうへ 見ん郭公 孝晴

度會氏。伊勢山田の人。貞徳門。山田誹諧集の著あり。

大坂 半井立ト

夜通しやけふ 九重に櫻鯛 一六

京 松坂和年

川の瀬か一夜にかはる月の御名 和年

松坂氏或は半井氏とも云ふ。名は松宣、通稱長兵衛、京都の人。立圃門。

大坂 北峰正甫

まつにあくひ 泪なそへそ郭公 正甫

北峯氏通稱未詳。重頼門。土佐派の畫家。泉州堺の人。

京 隼士親祐軒

雲水に菊をなかすや 鉢の先 常辰

隼士氏通稱長兵衛、松風軒と號す。又自徳翁と稱す。京都の人。立

圓の高弟。貞享二年二月九日歿。

著書 慕繁集、枉木葛、木間ざらひ等。

大坂女 榮 春

富士と高ねあくるほとゝきすそのかな 榮 春

井岡氏喜之^{ヨシユキ}之母。貞室門の才媛。壯年夫に死別す。元文二年七月十九日歿。

京 山岡 元 隣

繡かすり針山の木々の色 元 隣

山岡氏名は玄隣、字は徳甫。而溫齋、玄水抱甕齋と號す。京師の人。季吟門。醫を業とす。延寶三年或は寛文十二年夏疫癘に犯されて歿す。
著書 身樂千句、誹諧仕様諸國獨吟、誹諧小式、吉野山獨案内、たからくら等。

播磨 池田 是 誰

松にしくれ鹿のつのさす蜂の宮 是 誰

池田氏落葉堂秋風子と號す。播州姫路の人。一年上京して青地可頼住田正信の勧めによりて貞室の門に入り、聖廟獨吟百韻を成す。後貞徳直門となる。歿年未詳。

著書 破罵魔、初元結、玉くしけ、呂玖呂、俳諧書籍目錄。

堺 阿知子林庵

紅葉はや北は南は三の秋 顯 成

山井氏名は定宣、通稱林庵阿知子と號す。泉州堺南庄の人。醫を業とす。貞徳門。

著書 境界集、同後集、手くり舟。

伏見 高瀬 道 甘

幽なは身のひけしたる螢哉 道 甘

高瀬氏名は正代通稱彌三右衛門、落飾して道甘(或は道鑑)と號す。又、樂々庵専庵と稱す。梅盛前出の兄なり。貞徳門。城南伏見に住す。元祿四年二月十五日歿、年八十二。
著書 絲瓜草、花の露、人眞似、是まで草等。

京 大村 可 全

高聲にわが事きけか蟬よ蟬 可 全

大村氏通稱彦太郎、家名を白木屋と云ふ。今の白木屋の祖なり。近江の人、京都室町に住す。元隣と共に北村季吟門の羽翼と云はる。和歌連歌に達す。元祿二年正月二十日歿、年五十四。

大坂 伊勢村意朝

しやか母にあまへてもなけ郭公 意朝

伊勢村氏名は之次、通稱九兵衛落飾して意朝と稱し、また招鳩齋の號あり。初め貞徳門、後季吟に隨ふ。歿年未詳。

伊勢 竹内一葉軒

出かぬるや尻の重たき子もち月 三信

竹内氏、通稱市左衛門（或は吉左衛門とも）、一葉子と號す。伊勢松坂の人、初め貞徳門に入り師の歿後季吟に屬す。歿年未詳。

江戸 塙 満直

汗水のなかれをむすふ清水かな 満直

境氏、通稱善五郎。立和と號す。江戸の人。立圃門。

加賀 大橋可理

月に星や千葉の湊の波の紋 可理

大橋氏、通稱新之丞。貞徳門。加州金澤の人。

京 服部萬牧(數子)

茂りたる森や葉守の神屋敷 定清

服部氏、通稱喜三郎、離數堂、鵬鶴子の號あり、京都の人。初め貞徳の批判を受け後立圃の門に入る。歿年未詳、延寶中か。

著書 櫻千句、根なし草、尾蠅集等。

和彥新庄 桑山三之助殿

鹽屋光方のそみければ當座に しほらしや鹽やすしきわかの道泥 室

桑山氏、通稱三之助、美作守。大和新庄の人。天和中。

與州宇和嶋 桑折宗臣

峰入にえてとふかぬは貝もなし 宗臣

桑折氏、通稱左衛門。青松軒、本水居士、本水と號す。季吟門。伊豫宇和島の藩士。大海集の著あり。

京 望月 重供

むさし野はたゝひろ袖の尾花哉 重供

望月氏、通稱藤兵衛。初めは貞徳に従ひ後重頼の門に入る。京都の人。重貞の兄なりと云ふ。

江戸 小野信世

青天の白日や葉と花の春 信世

小野氏江戸の人。立圃門。

堺 玉手貞直

高根より次木に咲や瀧櫻 貞直

玉手氏備中の人堺住。

大坂 井岡義之

毛のあなやとさして内に胸の霧 友碩

井岡氏名は義之。通稱彌兵衛。大坂の人。貞室門。

江戸 水野半左衛門殿

大文字にそりやかつてむか年の春 守職

水野氏初名守政。伊豆守。江戸の人。

京 野々口資方

雨音は名こそその瀧かけふの月 資方

野々口氏京都の人。

伊勢 荒木田伊人

鬼をせんと先皮をむくり小栗哉 伊人

田中氏荒木田姓。外記と稱し、オクと號す。伊勢山田の人。

尾張 渡邊友意

待こかれ胸のひとこゑや戀し鳥 友意

渡邊氏通稱八彌。尾州名古屋の人。棕梨一雪の門。或は吉田友次の門とも云ふ。

著書 旅衣。

河内 清水春宵

心明上や待よはらするほとゝきす 春宵

清水氏河内の人。

大坂 了安寺夕翁

來て見るや釋迦はやり梅あ彌陀笠 夕翁

大坂初瀬町東本願寺の末寺了安寺の住職法名單念また單信につくる。雞冠井令徳門。(或は貞徳直門とも云ふ。歿年未詳。

京 井上友貞

五月雨は世界をたつのみやこ哉 友貞

井上氏通稱重右衛門、渺宇子と號す、京都の人、立圃門。歿年未詳。
著書 天神法樂集、神子のまひ、花いくさ等。

京 端(端) 定重

さかやきは老のかしらの雪間哉 定重

端氏通稱長兵衛、風船子と號す。京都の人。貞徳門。寛永の頃、山の口おほきな月の餅くらひの句を吐きて貞徳の高點を得たることあり。

大坂 伊勢村宗善

まな板や枯たる木にも櫻鯛 重安

伊勢村氏通名宗善、浪花の佛匠なり。初は古風を吟じ後宗因の門に入る。

著書 糸屑集。

河内 三宅女永覺

錦かと思ゆれとしかと紅葉かな 女永覺

三宅氏、河内の人。女流作家。

京 篠屋宗隆

とかへりも見もとりやせん松の雪 宗隆

中井氏通稱勘右衛門、家名を篠屋と稱す。京都の人。重頼門。歿年未詳。

江戸 門村兼豐

螢見に飛介ならぬ人もなし 兼豐

門村氏通名不詳。落飾して法橋に任ず。南都の人、江戸久保町に住し、晩年京師に移る。半井ト養門。

伊勢 荒木田武清

菰に見る前代みもんの葵かな 武清

荒木田姓、榎倉氏養子、本姓山田氏。幼名長助。通稱修理。伊勢内宮祠官。山崎宗鑑の筆跡を學びて伊勢宗鑑と稱せらる。延寶四年七月廿八日歿。

大坂 澁谷安明

秋風にはやりくわんとんの柳かな 安明

澁谷氏通稱新四郎、貞徳門の老弟なり。大坂に住し、男長藏又俳諧をよくす。寛永年中。

江戸 石田笑言

手にとれば爪に火とほす螢哉

笑言

石田氏江戸の人。

備前 池田豈休

五月雨や、ねのおもしろも沖の石

豈休

池田氏備前の人。

尾張 一原友我

鶯のつかむやみとのまく梅花

友我

一原氏名は等春。名古屋の人。令徳門(或は貞徳直弟とも云ふ)醫を業とす。

京 谷口重以

四方山の雪をうつむやふしの景

重以

谷口氏通稱十郎兵衛。同和樂山子と號す。定清門、後北村季吟に屬す。京都の人、寛文年中。

備中 堀田不必

おとろくやとう骨よしもとしのくれ

不必

堀田氏備中の人。

京 西田元知

種々薩埵の花に増や普賢象

元知

西田氏、通稱三郎兵衛。京都の人。貞徳門。

著書 拾玉集。

大坂 廣岡柳雨軒

るむしろに涼むや晝の錦へり

宗信

廣岡氏、俗稱紅屋彌兵衛、落飾して宗信、柳雨軒と號す。令徳門、浪花の人。歿年不明。

京 井野口流味

繪にかくや冬も櫻のかへり花

流味

井口氏、通稱新右衛門。定清門。京都の人。

尾張 清水春流

灌佛は衆生を救ふしやくし哉 不存

清水氏通稱孫三郎落飾して春流と號し。又吸月堂と稱す。尾張名古屋人也。後浪花に移住す。貞徳門にして尾陽三哲の一と云はる。歿年不詳。

著書 尾陽句帳。

堺 天神西坊

鶯や一聲二ふし園の竹 木王

堺天満宮西坊。

大坂 喜多村休齋

つくらさる雪やそのまゝ理佛性 立以

喜多村氏名は宗清、通稱休齋、大坂備後町に住す。初は令徳、貞室に従ひ、後立圃門に入る。

著書 入聲集、烏帽子箱等。

大坂 川崎方女

岩や屏風おくまりてさく姫つゝし 方女

川崎氏、方孝の妻。大坂の人、六女俳仙の一人。

京 松岡定用妻

吉野山見こす雲井の櫻哉 好女

松岡氏、定用(立圃門)の妻、通名於好、夫に學ぶ。女六俳仙の一人。

大坂 尼坂好道

雪にとめん袖うちはらふ鹿毛の駒 好道

尼坂氏、通稱四郎兵衛。大坂の人。重頼門。寛文年中。

堺 池嶋宗今

白雨や所によりてかは草履 成之

池島氏名は成之、通稱庄右衛門。成安門。泉州堺の人。

大坂 井口如貞

父孝に舞ふこきの子や老萊子 如貞

井口氏、通稱詳ならず。貞竹堂と號し、浪花に住す。令徳門、連歌を以て職とす。歿年未詳。

著書 小川千句。

江 有馬友仙

御成門は大名竹のかざり哉 壽白

有馬氏、通稱意菴、壽白と號す。江州坂本の人。醫を業とす。紅梅千句發起の人なり。歿年不詳。

攝州 茨木藤田有閑

歌に酒に詠と酔とやもち月夜 彩雲

藤田氏、通稱大門寺屋市郎右衛門。彩雲翁、榮閑と號す。松花堂の高弟。書及和歌を能くす。攝津茨木の人。

京 寂光寺泰圓

千草のかへり花かや野邊の霜 泰圓

京都寂光寺中圓光院の住職。初は貞徳門なりしが、歿後貞室、季吟に屬す。

京 中島貞宜

君かあたり見つ、おはせよ駒迎 貞宜

中島氏、京都の人。

大坂 宇野河内

東山はあらく外の花見哉

浄 治

宇野氏大坂の人。

池田 津田 道意

四方山を塗たりはけたり春の雪

屋 勝

津田氏通稱二郎兵衛貞徳門攝津池田の人。

京 片桐 良保

花のいこん月にはらせる嵐哉

良 保

片桐氏通稱清右衛門。三夢又兀元子と號す。京都の人始め令徳に
隨ひ後貞徳門に入る。

著書 獨歩集千句辨説集風俗集たはむれ草破枕集等。

池田 佐伯 正次娘

水油つけてのふるや柳髪

弁

弁女。佐伯正次の女。攝津池田の人。

京 高梨野也

門松やたてよこ町の人並木

野 也

高梨氏通稱丈菴京都の人。梅盛門。醫を業とす。和歌連歌及書道
をよくす。明暦萬治年間の人。

京 古筆 一村

鶯は花の錦のをりて哉

一 村

平澤氏通稱古筆勘兵衛落飾して了任と號し鑑定を業とす。法名無
二了佐の男なり。京都今出川に住し能書なり。立圃發句帳四卷此の
人に筆を執らしむ。慶安三年十月廿八日歿。

大坂 川崎 靜壽

五月雨は手かひのとらの引をかな

靜 壽

川崎氏通稱源太大坂の人。貞徳門。

堺 川邊 長治

やふれ團顯れわたる網代哉

長 治

川邊氏通稱彌右衛門落飾して瑞運と更む。泉州堺の人。初は貞徳
に隨ひ後重頼に屬す。

山崎釋 梵益

書初や今年ことふく犬筑波 梵益

姓氏不詳。山崎の宗鑑が遺跡に住す。貞室、季吟、梅盛、重頼等を友とし専ら俳道に遊ぶ。承應年間の人。

京 宮川正由

來る風はかと違せよ隣草 正由

宮川氏、通稱宇兵衛、名は正行、後正由と改む。又松亭子、松亭軒と號す。落飾して松堅と號し、道柯居士と云ふ。其菴を柿園と名く、大佛殿の南に在り、蓋し貞徳興立の遺跡にして、正由歿後門人之を傳ふ。享保十一年二月二十三日歿、年九十六。

著書 俳諧良材、あはを千句、和漢千句、歌仙自註等。

辭世 かり置し地水火風もかへすなり何もたねば殘念もなし。

堺 善通寺以圓

元三物はあたらしきよし筆始 以圓

泉州堺善通寺住職。

禁野釋 蒲劍

闇に出梟や月の鼠とり 蒲劍

伊豫秦 一景

不相口やは是花の口風の口 一景

秦氏、通稱十太夫、落飾して直入道と號す。伊豫秦山の人。貞徳門。貞享年中。

釋氏禁野の人。

堺 南 元順

花に鐘聲はよその夕かな 方由

南氏、通名元順、泉州堺の人、醫を以て業とす。宗因門。晚年談林を去つて正風に歸す。歿年未詳。

著書 寛悟集、二日千句等。

辭世 南無や空たゞ有明のほとゝぎす。

備前 一時軒

待は古し新しくなせ杜宇 惟中

岡西氏、通稱未詳。字は赤子、一時軒、閑々堂と號す。因州鳥取の人、弱冠より博覽多識たり。故ありて因州を去つて備前岡山に住し、専ら儒を以て業とす。延寶五年再び備前を去つて浪花に居を卜す。和歌を關與、兵衛盛貞及烏丸資廣卿に學ぶ。俳諧は宗因門。元祿五年八月十日歿、年五十四。

著書 太郎五百韵、次郎五百韵、俳諧蒙求、俳諧三部抄、遊園扇返答、破邪顯正返答、自註評判返答、風体集、あまの子のあそび等。

大坂天滿 八木宗久

みくらへよ富士は磯崎の松の雪 宗久

八木氏。大坂天滿の人。

更後 唐本 一直

花ならてあらはれにけりさくら満

一直

肥後 熊本一直

花ならてあらはれにけりさくら鯛 一直

中野氏。肥後熊本の人伏見住。貞徳門、寛文年中。

江戸 石田 未琢

あやめふく軒端は鳥のおたれ哉 未琢

石田氏、通稱要之助、未得の男。艮堂と號す。父に學ぶ。天和二年三月二十日歿、年七十餘、淺草誓願寺に葬る。

著書 一本草。

大坂 齋藤 玄眞

晝見えぬ蚊帳や三輪の作り物 禾刀

齋藤氏。京都の人。梅盛門、醫を業とす。

京 小野 宗惠

そたてゝは杖とも頼む桑子哉 久重

小野氏又内海氏。通稱長右衛門。號六字堂。京都の人。貞徳門。

大坂 林 定親

團雪の扇の風や富士おろし 定親

林氏通稱勘右衛門名は久勝器水子と號す。浪花の人。立圃門。

伏見 多門院

枕より跡より寒きしはん哉 問加

山城伏見多門院の住職間隨と號す。道甘門。

大坂 藤田 幸庵

鬼も年とつてかまうよ大豆の數 不琢

藤田氏大坂の人。

和邇郡山 林 宗甫

紅葉かりや家をはなれて八九月 宗甫

林氏通稱蠟燭屋勘兵衛京都の人。重頼門。和州郡山に住す。國學をよくす。

大坂 西田 久任

天人か雲路を分る富士詣 久任

西田氏清兵衛と稱す。

江戸 森 朝甫

うそ鳥のはしやさなから琴の爪 親信

森氏通稱七郎兵衛。紅甫紅圃と號す。江戸の人。立圃門。

和邇 今井 正盛

み、鐘に散な心の花盛 正盛

今井氏通稱與二兵衛和州今井村の人。
著書 耳なし草。

阿波 棕梨 一雪

謠初や酒宴中指春の今日 一雪

棕梨氏通稱三郎兵衛牛露軒又柳風菴と號す京都の人。江戸阿波等處々に歴巡す。初め貞徳門に入り師の歿後西武梅盛等に遺事を傳ふ。

家譜に延寶八年歿とあるも確かならずとの説あり。
著書 雨あがり行事板晴小袖糊こしらえ鋸屑茶抄竹せんだくもの、
ふくさものの言羽織作者盡等。

紀若山 女 高田

短冊は軒の風鈴か家櫻

隣 寶

高田氏。女流作家。紀州和歌山の人。

大坂 前川 半幽

入月や松にのこして揚燈籠

由 平

前川氏名は由平、夕舟子と號す。浪花平野町に住す。晚年釋門に入りて自入と改む。宗因門。寶永年中歿すと傳へらる。
著書 明骨集。

備中 吉岡 信元

今一度あふよしもかな破相撲

信 元

吉岡氏、備中の人。(信光の事か)

江戸 延澤 破扇子

節分の舟は波濤を疊かな

破扇子

延澤氏、本姓寺井氏、名は和俊。通稱詳ならず。熱田の人、江戸住。和久又貞室門。

大坂 吉田 立敷

今宵もや神代のむかし女男星

立 敷

吉田氏、大坂の人。立圃門。

大坂 高木 川草子

それ花につらきは下戸とあらし哉

松 意

田代氏、本姓は高木氏、名は秀延、琴風軒、川草子と號し、後檀林軒と改む。大和の人、大坂に住す。宗因門。寛文の末、江戸に下り、遠藤正友等と江戸檀林を創む。

伊勢 山田 二休

草双紙よみあけ讀下飛灯

二 休

慶會氏、伊勢山田の人。

江戸 高井 立志

雲雀もや雲井にあかる駒迎

立 志

高井氏、二世。松樂軒、和諧堂と號す。京都の人、江戸住。立圃門。天和元年十月廿一日歿。

南都 桑門 宗珏

かん鍋のつるにもなるやふたう酒

宗珏

釋氏。奈良の人。

大坂 川崎 方孝

下は上につきしたかふや豕餅

方孝

川崎氏大坂の人。立圃門。

肥前 團野 朋之

楊梅に昔しのふのおく齒哉

朋之

團野氏肥前の人。

大坂 高石 石齋

釋迦如來死一はいやたゝきかね

石齋

高石氏大坂の人。

紀州藤代 石倉 一入

祭ぬる五輪や人の玉かしは

一入

石倉氏通稱三郎兵衛容膝軒と號す。紀州熊野長島の人。貞徳門。

江戸 北村 宗利

座組つゝほゝんたんほゝ鼓草

宗利

北村氏通稱市右衛門。江戸の人。立圃門。

南都 谷松 笠軒

片耳は枕うらみむ時鳥

西丸

椎本氏初姓谷氏。名は則氏字は少文。松笠軒舊徳翁甘泉庵狂六堂春理齋八千丸榮特小僧等の號あり。初め西丸と稱して幕府の忌諱に觸れ西磨と改め次いで才磨と號す。南都の人初め江戸に住し後浪花に移る。西武宗因西鶴に教を受く。元文三年四月二日歿年八十三。大坂天王寺椎寺藥師堂に葬る。

高野山 蓮華寺 吟市

名や三鉢眞言門の鏝り松

吟市

名は尊海。蓮華寺の住職近江日野の人後江戸安住院に住す季吟門天和二年寂。

江戸 竹井 嶺利

涼しさを手のものにする扇哉

嶺利

竹井氏通稱勘右衛門。江戸の人。立圃門。

京 朝江一風子

風吹は散つ白波花の景 種 寛

朝江氏通稱小左衛門名は忠榮梅遊軒一風子と號す。京都の人。立
圃門。

大坂 中堀柳和軒

鷺飛て白魚躍る水際哉 幾 音

中堀氏。器音とも號す攝津尼ヶ崎の人。宗因門。

和州 多武峯西院

波によるは藤の棚なし小舟かな 紀 子

大和多武峰西院の住職。高政門。延寶六年大矢數一日千八百句を
興行す。

大坂 蔭山玄端

白くともみる目は青し松の雪 無 睦

蔭山氏。大坂の人。

伊勢 山田竹犬

おしいたの花にも馴る御影かな 竹 犬

伊勢山田の人。

大坂 武野保俊

別れてや夫前佛はすてに舍利 保 俊

武野氏大坂の人。

京 犬井貞恕

秋好む中宮ならし龍田姫 貞 恕

犬井氏俗稱治郎兵衛名は重次落飾して貞恕と改め二義軒と號す。
越前敦賀の人京都四條東洞院に住す。貞室門。万治の頃大津に寓居
したる事あり。或年いまだ遠くはのびじ落人といふに道ばたにいき
りこそたて馬糞と云ふ句を附けてより大津の馬糞と渾名されたり。
貞室病んで死せんとするとき貞恕を以て花ノ本正傳三世となす。元
祿十五年三月四日歿年七十。山城上鳥羽實相寺に葬る。
著書 蠅打阿太知千句新玉海集等。

大坂 淺沼宗貞

紅葉見やあらそひかねて色上戸 賛 也

淺沼氏賛也、望山軒と號す。宗因門。浪花の佳。書を能くす。

備前 小松原長時

唐笠やさくらかさしてけふの雪 長時

小松原氏、備前の人。

京 柏谷一滴

月も今宵十九出家か影法師 一滴

柏谷氏、京都の人。

長門 兒玉規吉

花の枝をさすも龜井の浮木かな 規吉

兒玉氏、長門の人。

伏見 栗田玄康

出てから天庭に入な月の弓 玄康

栗田氏。伏見の人。貞徳門。荻野安靜の友なり。連俳に達し、都下に鳴る。男玄賛亦斯道をよくす。

大坂 平山方教

鐘きくや曉あさつき春の月 方教

平山氏通稱孫兵衛、名は直之。重頼門。家名を奈良屋と號す。大坂本町の人、後落飾して方石或は不琢と號す。

大坂 山城大掾

芝居にや花の外には松はかり 貞因

榎並氏(二書に永田氏)通稱鯛屋善右衛門、長閑堂、白后齋と號す。貞室門。大坂の人、菓子商なり。曾て山城大掾に任ず。貞室彼に「天水鈔」を授けしに朝夕之を机上に置きて珍愛せりと云ふ。元祿十三年三月廿三日歿、年八十。狂歌に名高き由縁齋、貞柳はその男なり。

播州 垣内交云

一をもつて十月しるき時雨かな 交云

垣内氏、通稱新太郎、播州姫路の人。貞室門。

京 島本正伯

こまなめていさ水かはん七日みそ 正伯

島本氏、通稱七左衛門、名は正長。正伯と號す。京都の人。西武の門。

武州 板橋金剛院

短さくも名聞くるし寺の花 恩 眞

武藏板橋金剛院住職。

京 奥西友三

磐石とならんすなほな御代の春 友 三

奥西氏通稱市左衛門、名は義茂。京都の人。令徳門。

大坂 井原西鶴

只の時もよしのは夢の櫻哉 西 鶴

井原氏通稱詳ならず。松壽軒、二萬翁、二萬堂。初め鶴永と稱し、後西鶴、西鵬と改む。宗因門。貞享元年六月、住吉社頭に、大矢數を興行し、一日一夜の獨吟實に二萬三千五百句、此の後二萬翁の名あり。又、浮世草子の作者として、淨瑠璃の作者近松門左衛門と共に元祿時代の二大文豪たり。元祿六年八月十日歿、年五十二。

辭世 浮世の月見過しにけり末二年

著書 大矢數、後大矢數、柱木葛博、多百合、杉やき集、西鶴五百韻、兩吟一日千句、石車、胴骨等、(浮世草子書目は略す)。

堺 藤井徳庵

木の春や梅松か枝の金盞銀 社 樂

藤井氏堺の人。

大坂 平野仲安

女子の島か出くるこもくおなこ竹 仲 安

平野氏大坂の人。

大坂 和氣由貞

初鴈も廿日はおそし新参 由 貞

和氣氏名は由貞、遠舟、臚磨、東柳軒と號す。浪花の人。宗因門。能書を以て聞ゆ。

著書 浪花辨慶、姿哉、八重一重。

江戸 蝶々子貞宣

花を酒くみてしるきや樂の種 蝶々子

神田氏通稱左兵衛、初名貞頼。花樂軒、風吟庵、紅葉軒、蝶々子と號す。江戸の人。貞室門。

著書 思出草、物忘草、たちぎ、松茸草、己巳己當世男等。

大坂 岡田 悦春

むさし野や富士か太鼓のつくくし

悦春

岡田氏通稱大文字屋二郎兵衛浪花の人初は令徳後宗因に属す。

京 森下 貞盛

見れは目の玉にもぬける柳哉

貞盛

森下氏京都の人。重頼門。

大坂 山口 清勝

花に酌や今一しほの色上戸

清勝

山口氏宗因門大坂の人。

京 荻萩野 似船

九月十三夜 貞隆興行に先の月のうしろすかたやけふの影

似船

富尾氏通稱彌一郎名は重隆。蘆月菴と號す。後落飾して似空軒二世續いて似船と改む。京五條の人。荻野安靜の門。寶永二年七月十六日歿行年七十七。

著書 隠がさ蘆花集堀川水苗代水勢田長橋大上戸安樂音火吹だけ、入相鐘等。

江戸 駒井 加友

秋風やはたへに立し砒

加友

駒井氏江戸五哲の一人と稱する荒木加友泰庵の事か。

大坂 平野 治平

兵法の霧の印かやくらま山

治平

城越氏或は堀越氏攝州平野邑の人。古筆賞鑒を以て業とす。宗因門。

著書 古今俳諧師手鑑。

京 住 俊秀

撫子や草のはらから兄弟

俊秀

村瀬氏。京都の人。荻野安靜門。

江戸 一孤軒 調和

鹽尻や頭は隠す雪の不盡

調和

岸本氏通名猪右衛門名は友正。土齋壺瓢軒。奥州の人江戸に住す。始め京師に出て荻野安靜の門に入り、荷梅盛の教をも受けた。正徳五年十月十七日歿行年八十有餘。

辭世 此一句衆議判もなし風野

著書 是まで草、富士石、題林一句等。

河内小山 日暮 重興

吞さしや畑に残る若たはこ 重興

日暮氏、河内小山の人。

京 北村 湖春

葉かくれや隠者かたきの園の菊 湖春

北村氏、幼名休太郎、名は季重、落飾して湖春と改む、又俳諧堂と稱す。季吟の長子なり。書をよくす。父に従て幕府に参任し法橋に叙す。元祿十年正月十五日父に先立ちて歿す、年五十餘。池之端七軒町正慶寺に葬る。

大坂 中林 素玄

姥か火かほしかかはちに飛螢 素玄

中林氏、大坂の人。

京 田中 銀竹軒

花を見ておらぬものこそなかりけれ 銀竹

田中氏名は信光。光方と號す。京都の人。西武門。
著書 雀子集。

大坂 生白庵行風

鳥かなく吾妻の春や宮古入り 行風

浪花高津の隠僧、生白庵又は懷中と號す。松江重頼の門。狂歌をよくし自ら浪花高津汚道士、生白庵行風と號して弟子頗る多し。歿年未詳。

著書 古今夷曲集、後撰夷曲集。

堺 柏井 一守

八月十四日の芋よ／＼との子もち月あすの月 一守
夜月を見て

柏井氏、泉州堺の人。

讃岐 半孤軒省我

さてはあの月がないたか時鳥 一三子

中野氏。半孤軒、泉州子と號す。讃岐の人。重頼門。

京 六條道場禪閑

尼寺にて下間 時宗ならて名や尼寺の花の庭 禪閑
治部卿會合に

京都六條道場の住僧。

堺 細谷柳夏

松に藤かゝる折にや人たかり 成元

細谷氏通稱未詳名は成元。泉州堺の人。正法寺成安の門。

大坂 和氣遠舟

唐いもや仲麿もみしけふの月 遠舟

(前出、和氣由貞の項参照)

京 寺田無禪

月とゝもにまめもいてゆや有馬山 無禪

寺田氏京都の人。

大坂 片岡松門亭

櫻ちるこのした事よけふの風 旨恕

片岡氏通稱庄二郎。松舟軒松門亭と號す。浪花の住。初め季吟の門後宗因に屬す。

京 川地素謙

花の日數へおひ比丘尼か天津風 素軒

川地氏通稱又兵衛名は正量。後年素謙を素軒と改め號す。京都の人。妙法院の宮に仕ふ。貞室門。

堺 長谷寺秀政

古酒なくは覺ざらましを一夜酒 秀政

堺長谷寺の住僧。重頼門。

京住 高政

鮎鮎やつゐは五輪の下紅葉 高政

菅谷氏。惣本寺半傳連社と號す。京都の人。京檀林を創始す。法橋に叙せらる。宗因門。

著書 中庸姿、繪あはせ、同後集、是天道三百韻、江戸隨等

江戸 梅原ト入

寒菊や秋なき時の酒あひ手 ト入

梅原氏。江戸の人。半井ト養門。延寶三年歿。

京住 自悦

下戸も今化をあらはす花見かな 自悦

濱川氏名は行中太兵衛と稱す江戸の人。季吟門、後一風をなす。著書 空林風葉集、二日三百韻、花洛六百韻等。

大坂女 龜之

やくのとしわかやくやあそふにひまなき花見山 龜之

龜之。大坂船場久太郎町佳。女流作家にして太夫櫻に入選す。

京住 忠也

紅葉する山は一色にしきかな 忠也

忠也、京都の人。

肥前 石井如自

けふそ燐のまなこのたまにひかりあり 如自

石井氏嘲鷗子と號す。肥前佐賀の人。初め立圃及梅盛に屬し宗因西國に遊べるとき門弟となり、兩吟二百句を連ぬ。「一時雨は即ちそれなり。」

京 中島隨流

おきもせず寝もせて夜るや冷こたつ 勝直

中島氏通稱源左衛門名は勝直。松風菴と號す。落飾して隨流と改む。京都の佳。山本西武門。即吟に達し廻文をよくす。寶永五年二月十一日歿、年八十。

著書 貞徳永代記、破邪顯正、雀子集、鶯ぶえ、百千鳥、二ツ盃等。

堺 細川成政

人も汗もしはしと、まる清水哉 成政

細川氏。泉州堺の人。

京 伊藤信徳

片見せに山ある野邊の花屋かな 信徳

伊藤氏通稱助左衛門。梨柿園、竹犬子。幼時貞徳より徳の字を許さる。貞徳歿後、山本西武、高瀬梅盛に學ぶ。家事の爲に屢々東府に往復する毎に檀林の徒と交りしを以て、其の句に異體多し。又芭蕉とも交際あり。元祿十一年十月十三日歿、年六十六。

著書 七百五十韻、浮世姿、白重、胡蝶判官、桂姿、江戸三吟等。

大坂 樋口如見

是に候御覽候得帽子櫻 如見

樋口氏大坂の人、宗因門。

京 葉分軒

首たけのおもひや星の川渡り 千之

大原氏後望月氏と改む。葉分軒、近隣子と號す。京都の人。松江重頼の門後に宗因の檀林風を吟す。母を子盈と號し俳諧をよくす。

大坂 半捨軒

花筏までことゝはんおくり状

正 察

大坂西道寺住職。大坂の人。宗因門。
著書 淨土珠數。

京 西六條常樂寺

八月十五日 いもさけや月にはみたるゝ心あり

素 隠

京都西六條常樂寺住職。

攝州 多田院別當

罪障の山やくつるゝ佛名會

月 山

攝津多田院の別當。

京 古筆了佐

雨中としてさけにやよひの二日かな

了 佐

平澤氏名は節世通稱彌四郎。正覺庵襟材と號す。近江の人。古筆
鑑定家祖なり。關白秀次命じて古筆氏を稱せしめ琴山の印を賜ふ。
寛文二年正月廿八日歿年八十一。

大坂 牧野一得

月も耳もかたふくや山ほとゝきす

西 鬼

牧野氏初め西鬼と號し又喜不齋鬼翁と稱す。宗因門。浪花の人。
享保十三年歿。

美濃 岡田鑑玄

こゝろはやをのか糸緒の莒柳

滿 足

岡田豊前守名は善政。美濃の人。近衛應山に仕ふ。歴代滑稽傳に「岡
田將監は俳諧に名ある人也。美濃の國の産。一とせ近衛殿へ御見舞
申されければ、『五月雨によくこそきたれ美濃のもの』とあそばしけ
れば、『あのへこのゑを探す鶴つかひ』と云脇を付て申上られたり。」
とあり。

大坂 梶山宗吾

長閑なり是てこそあれけふの春

保 友

梶山氏幼名は多吉後吉左衛門と改む。落飾して宗吾居士と云ひ、海
嶽庵無心子と號す。大坂の住。性淳朴人と交りて好し。貞徳門。歿
年未詳元祿の末年か。
著書 古今俳諧百句集、獨吟千句、大硯集等。

伏見 小堀遠江殿

冬に今朝霞や春のさきそなへ 宗甫

小堀氏は政一、通稱作助、新助。從五位下遠江守、孤蓬庵と號す。伏見奉行、作事奉行を勤む。吉田重能に茶法を學び、遠州の一派を創む。又書畫和歌を能くす。正保四年二月六日歿、年六十九。

二條前關白康道公

つき山作り木や庭にも瀧の糸櫻 藤

攝政關白右大臣二條康道。一字名「藤」。千丸と號す。貞徳門。寛文六年七月廿八日歿、享年六十。

大坂 西山宗因

いもはく先月をうるこよひかな 西翁

西山氏名は豊一、通稱は次郎作。初め一幽と號す、後宗因と改む。又自ら西翁、梅翁と號す。此の外、西幽子、梅幽子、梅花翁、野梅子、忘吾子等の號あり。元肥後國加藤家の侍臣なりと云ふ。連歌を里村昌琢に學んで、天滿天神月次宗匠たりしが、後之を長子宗春に譲りて、己は俳諧に専心す。即非禪師の法嗣、法雲和尚の教を受けたる事もあり。西國に遊び、江戸に下り都に上り、専ら新意を吟じて、後年檀林風の祖と稱せらる。門弟に西鶴、松意、高政、惟中、風虎、露沾等あり。天和二年三月廿八日歿、年七十三。大坂天滿寺町西福寺に碑あり。

著書 向榮文集、蕃椒百韻、獨吟千句、後五百韻、鎌倉五百韻、西吟集、ひるあ見、廿日草、百韻、四人法師、十會集、阿蘭陀丸二番船、西翁十百韻、無言抄、大坂獨吟集山の端千句、天滿千句等。

延寶の中頃二萬翁の西鶴撰ひおかれし誹士の手鏡
を見るにふるき作者のもれたるありその比未熟に
てのそきたるありかれ是拾ひあつめけるに其數さ
ためかたければ前集の例に習ひ今又二百四十餘り
六人にさため侍へるかつは京に田舎に遠きちかき
風雅の世に隠れたるもほひなくおもひて紙上に顯
すこれにもれたる人もあまたあれと數つまりたれ
はやみぬなを又の後集あらまほしくこそされは儒
に後なき吏をほめすそれにしたかひ此一集思ひ立
て終にやむ事を得すして誹諧手鏡後集となすもの
ならし

難波案山子

元祿十三_{庚辰}陽月上旬

佐倉笑種



八幡山 瀧 本 坊

かけうつるきしの歎冬川の底 昭 乗

俗稱中沼式部山城男山瀧本坊住職。松花堂惺々翁と號す。大師流の書を能くし、近衛信尹、本阿彌光悦と共に平安三筆たり。又狩野派の畫及和歌、茶道に通ず。奈良の人、寛永十六年九月十八日寂、年五十六。

京 妙滿寺成就院

祖師の月忌けふ二月の四七かな 日 如

京都妙滿寺成就院住職。貞徳門。

京 加藤貫風

雲紙に丸印なれや月のなり 雲 堂

加藤氏、名は勝明。空門子と號す。京都の人。貞徳門。貞室と親み深く、松江重頼撰集の批言、歩行神二卷を編す。

京 萩原照星

鶯の初音は笛のひしき哉 照 星

萩原氏、京都の人、立圃門。

江戸 高津令巾

年男女もすとして試筆哉 令 巾

高津氏、江戸の人。

比叡山 無量光院

梅ならて香もしもかなや柳髪 靜 山

比叡山無量寺の僧、定家流の書をよくす。

遠州 森 清 長

哥人の所題に出る鹿や歌人のほらこもり 清 長

望に鹿を 森氏通稱小左衛門、遠州掛川の人。立圃門。著書 しのぶ草。

京住 雁金休音

地さかひの氷や劔波のひら 休 音

雁金氏、京都の人。貞徳門。

駿河久能 德 窓

との葉や古入道も花の春 德 窓

駿州久能山德普院の住職。貞室門。

京 大和田武門

いろよきは紅粉にさせる梅花哉

武門

大和田氏京都の人。

京 柳原正房

名にあふや影さへ月の水上論

正房

柳原氏京都の人。

京 富田宗祐

よれまとふつるや臍の緒小姫瓜

宗祐

富田氏京都の人。

山崎住 ト 琴

七つにて殿はほしとや女七夕

ト 琴

柴垣氏一下又は松風軒と號す。城南山崎の人。北村季吟門。繪をよくし梵盆と友たり。

著書 越路草。

堺 硯氏一武

浮世かな犬の長ほえ郭公

一武

硯氏通稱市兵衛泉州堺の人。山本西武門。

大坂 大平伯貞

大忌をいはふ板かね祭かな

伯貞

大平氏大坂の人。新續犬筑波集入選者。寛文年中。

平野 末吉宗久

ことの葉の種や難波の梅のさね

寸斗

末吉氏名は宗久稱治兵衛尉道節の男。攝津平野の人。連歌を能くす。元禄七年閏五月十日歿年八十三。

江戸 岩田有哉

名木も老ては愚にやかへり花

有哉

岩田氏名は有次通稱二郎兵衛。江戸の人。立圃門。

京 平尾幸以

聲を笠にきよ五月雨の郭公

幸以

平尾氏、京都の人。季吟門。寛文中。

姫路住 内山一イ子

難行か空やくはすの鉢たゝき 一イ

内山氏、通名は正菴、姫路の人。初め貞徳に従ひ、後高瀬梅盛に属す。
著書 早梅集。

肥後 宗雲寺山石

下戸ならぬもゐの子はよしともちる哉 山石

肥後八代宗雲寺の住職、立圃門。

京 八千代

かつらおとこほゝへはいるやねやの月 やちよ

洛西島原奥村家の遊女名は尊子。吉野につぎし名妓にして書及和歌を能くす。重頼門。

尾州 加藤村俊

蓬萊はおもしろの齒朶のけしき哉 村俊

加藤氏、尾張の人。

勢州 榎倉武因

老か身や目金にきかむ杜鵑 武因

榎倉氏、通稱權次郎、武晴の男。伊勢内宮の祠官。天和元年正五位下に叙せらる。

大坂 伊勢村次良

短冊や柳の髪のひよもとひ 次良

伊勢村氏、意朔の弟。大坂の人。季吟門。寛文中。

越前 山川無樂

神なりの火か目に消るとふ螢 無樂

山川氏、越前の人。

伏見住 中野一直

聲のせぬ冬野の虫やさりき留守 一直

中野氏、肥後熊本の人、山城伏見住。貞徳門。寛文中。

江戸 北村正立

御門主 籠花の草に禮者は對面所 正立

北村氏名は季次、通稱源之丞、幼名權三郎。北村季吟の次子。初め京新玉津島に住し、父に従て東府に移る。元祿十五年八月二十一日歿、年五十一。谷中瑞輪寺中玄妙院に葬る。

江戸 松岡 定用

目前にひらくさとりの花もかな 定用

松岡氏、江戸の人、立圃門。妻好女亦俳人なり。

大坂 武野 俊佐

神まつる卯月いむけな聲せぬ鳥 俊佐

武野氏、大坂の人。

京 辻 宗順

過るとも二日酔せし一夜酒 宗順

辻氏、京都の人。

江戸 高野 幽山

花をふんて鑑輔うらめし暮の聲 幽山

高野氏名は直重、通稱藤兵衛丁々軒と號す。京都の人、江戸住。重頼の門。元祿の頃任口藤堂高通に仕へて竹内爲入と改む。伊勢久居に歿す。

著書 江戸八百韵俳枕。

大坂 小西 來山

鳥ぞ啼鐘は花よりとつとうへ 來山

小西氏、通稱伊右衛門。十萬堂、湛々翁萬平と號す。泉州堺の人。初め前川由平、後宗因門。二十歳に滿たずして俳諧の點者となる。晩年攝南今宮村に移り、享保元年十月三日歿。年六十三。逢坂山一心寺に葬る。

辭世 來山はうまれた咎で死ぬる也、それでうらみも何もかもなし。著書 萬人講木の葉駒、いまみや草綾いまみや草。

京 東 常倫

うへ人やめさせ羅綾の衣かへ 常倫

東氏名は家重、京都の人、立圃門。

草津住 飯袋子重道

千代の坂に出茶屋た、なん君か春 重道

木村氏飯袋子と號す。近江草津の人。高瀬梅盛門。

京 池 西言水

日おもひ出つ赤人にこの鏡餅 言水

池西氏名は則好、通稱八郎兵衛。紫藤軒風下堂、洛下堂の號あり。奈良の人京都住。初め江戸に出て檀林派と交り、後京に登りて重頼に屬す。木枯のはては有けりうみのおとの句に依つて世に木枯の言水と稱せらる。享保七年九月廿四日歿年七十三。初め京都朱雀野大通寺に葬り、後京極誠心院中和泉式部の塔側に改葬す。

著書 江戸新道、東日記、江戸蛇のすし、江戸辨慶、後様姿、京日記、都曲、京の水、我身皺等。

大坂 櫻井親十

餅の名を誰か世につきて萩の花 親十

櫻井氏名は正友、浪花の人。立圃門。

大坂 齋藤賀子

南都大佛の胸から出た歟三ヶの月 賀子

齋藤氏、禾刀の男、京都の人、大坂住。宗因門。太夫櫻に入選す。

著書 みづから集蓮の實集。

伊丹 鹿嶋宗純

鼠さへちつとはなくそ郭公 宗純

鹿島氏、宗運の弟、酒造業、攝津伊丹の人。

京 妙満寺素桂

万葉の朱引の筆や夕時雨 素桂

京都妙満寺住職成就院日如の法弟、心性院と號す。安靜門。

膳所 尼智月

有となきと二本さしけりけしの花 智月

川井氏、大津の傳馬役、佐右衛門妻、乙州の母なり。江州大津の人。若き時、京の御所に奉仕して歌路と呼ぶ。芭蕉門。寶永三年歿、年七十四。

大坂 喜多泰重

雪の日は學寮ならぬ窓もなし 泰重

喜多氏、大坂の人。立圃門。

羽州 晚翠堂桂葉

いはふ心瓶ぞ知らんとその酒 桂葉

平田氏名は尊爲。秋田能代港大光院の修驗者なり。北村季吟門。寶永三年歿、年八十三。

備前 志賀俊安

元いは、哥のわれ見てもなり門の松 俊安

志賀氏備前の人。

大坂 園

女

たへまに
まうてい
まんたらを
おかみて

衣更身つからをらぬ罪ふかし

その女

渡會氏秦師貞の女斯波一有渭川の妻。伊勢松坂の人。初め大坂に住し後江戸に移る。晩年眼科醫を業とし落飾して智鏡と改む。初め美津女に學び後芭蕉門に入る。芭蕉歿後江戸に出て其角に學ぶ。享保十一年四月廿日歿年六十三。深川靈岸寺中雄松院に葬る。

辭世 秋の月春の曙見し空は夢か現か南無阿彌陀佛。

京 田中 常矩

あらはもし神代の面炮若夷

常矩

田中氏初め麻尾氏名は忠俊通稱甚兵衛落飾して眞齋と號す。京都の人。片桐良保の門。蛇の助がうらみの鐘や花の暮の吟により蛇之助常矩の名を得たり。

著書 花見三吟、雜巾捨舟破帯ねざめ塵取五百韻等。

江戸 小澤 ト尺

酒人や根深かさして河豚狩

ト尺

ト尺一世。小澤氏通稱太郎兵衛。臨齋孤吟吟叟と號す。得入の男始め季吟門後芭蕉門。江戸本舟町の名主なり。芭蕉東都に下り始めて草鞋を解きしはト尺の家なり。寶永六年十二月廿四日歿、淺草誓願寺

評書師手鑑後集

に葬る。

京 妙滿寺草恩院

残る雪のとけぬや手下の永談義

日 怡

京都妙滿寺草恩院の住職。

身延久遠寺日脫上人

螢火は見ななみよりのしそく哉

空 雅

俗姓逸見氏、久遠寺三十一世住職。一圓院、遊明子と號す。越中の人。元祿十一年九月廿二日寂年七十三。

伊勢 足代 弘氏

大空におほふ蚊屋かな門涼み

弘氏

足代氏初名貞嗣。助十郎民部、又左衛門と稱す。神風館一世と號す。二福宜常辰の七子、弘仲の嗣、足代家中興の祖。伊勢山田の祠官。從四位下に叙せらる宗因と交遊あり。天和三年八月十八日歿、年四十四。

京 加納 道與

花よりやたんこになれとつくね雪

道與

加納氏京都の人。

姫路 武田 三吉

見るに兩の眼やのほる花の雲 三吉

武田氏姫路の人。此の句玉海集に見えたり。

京 蜂屋 宗富

香をますは君子なるらし梅の花 宗富

蜂屋氏京都の人立圃門。

郡山 岡村 正辰

風ふかぬ谷こそ梅かくれ里 正辰

岡村氏大和郡山の住。池田正式門。
著書 大和順禮集續大和順禮集。

廣嶋 水野梅吟子

歌都か駒をもはなせ花の山 梅吟

水野氏榮圃と號す。廣島の人犬坂住。太夫櫻に入選す。

大坂 松江 近吉

山は富士根かあればこそ雪の花 近吉

松江氏。重頼の弟。京都の人犬坂住。

京 清水氏言聽

みつかきにきゐる水鶏や神たゝき 言聽

清水氏通稱四郎左衛門京都の人貞室門。

肥後 荒瀬 金門

子たからを入る土藏かつはめの巢 金門

荒瀬氏肥後の人。

京 馬場 久次

去年種てえならぬ柿の杔かな 久次

馬場氏京都の人。

伊丹 岡島 猿風

むしの聲蒲團を一ツかしてくれい 猿風

岡島氏攝津伊丹の人。

葛岡修理 太夫殿

若竹や一ふしあらふ庭の奥 宣慶

葛岡氏京都の人犬坂住もと宮中に仕へ和歌を能くす。元祿年中。

著書 大和歌集續大和歌集

廣島 水野梅吟子

歌都が駒をもちなせ花の山 梅吟

水野氏榮園と號す。廣島の人。大坂住。太夫樓に入選す。

大坂 松江近吉

山は富士根かあればこそ雪の花 近吉

松江氏。重頼の弟。京都の人。大坂住。

伊丹 岡島猿風

むしの聲蒲團を一ツかしてくれい 猿風

岡島氏攝津伊丹の人。

葛岡修理太夫殿

若竹や一ふしあらふ庭の奥 宣慶

葛岡氏京都の人。大坂住。もと宮中に仕へ、和歌を能くす。元祿年中。

京 宮川了味

かさの柄をたゝくにしるし夜の雪 了味

宮川氏通稱三郎右衛門長之と號す。貞室門。

尾州 橋本每延子

春の日かり清きや雨であらつたま 每延

橋本氏通稱貞四郎、尾州熱田の人。貞徳門。

京 藤村倫員

月の頭丸き故かや影法師 倫員

藤村氏名は忠久、通稱源之丞芥舟庵と號す。落飾して惣堅と改む。京都の人。高瀬梅盛門。茶道を能くす。著書 木玉集。

阿波 富松吟夕

春ぞ今朝男子を産し代の氣色 吟夕

富松氏名は可佳。修琴齋と號す。播州飾磨の人。阿波に住す。

京 半田常牧

からかねの雁や聲吐く石の海 常牧

京 松浦廣寧

心そめつるりひわ目白青しとゝ 廣寧

松浦氏京都の人。

堺 淺井正村

短夜も寐起の床や長あくひ 正村

淺井氏泉州堺の人。

京 光堂愚鈍

八幡男山へそつと志野邊の女郎花 愚鈍

京都の人。

京 齋藤如泉

卯の花や草紙よまるゝ夜の窓 如泉

齋藤氏初め朝三と云ふ。京都の人。梅盛門。庵を四條道場中に結んで眞珠庵と號す。正徳五年八月十七日歿。年七十二。著書 重寶記狂歌句式漢和千句、松ばやし、池心亭番匠童等。

大坂 白江(井)醉鶯

虫のおるはたに尾花をまねき哉 醉鶯

白井氏通稱玄桃始の名は白云。浪花の住醫術を業とす。宗因門。筆道に名あり。

京大佛 永昌軒弁朗

なくけなのけなかいやなり郭公 弁朗

京都大佛住。

江戸 神野忠知

白炭ややかぬむかしの雪の枝 忠知

神野氏通稱長左衛門、江戸の人。井上春清門。前掲の秀吟によりて世に白炭の忠知と稱せられたりと傳ふ。延寶四年十一月廿七日自殺す。年五十二。

辭世 霜月やあるはなき身の影法師

池田住 佐伯氏女

花生や竹のきりよのたまり水 小弁

佐伯氏攝津池田の人。女流作家なり。

美濃 谷木 因

夏枯の滯木を蠣の落葉かな 木因

谷氏通稱九太夫。觀水軒、白櫻下、杭瀬川翁の號あり。弱年の時は木端と號す。美濃大垣の人。北村季吟の門。

京 三井秋風

右は山左は園鋤シ梅シ曙シ 秋風

三井氏名は時次、京都の人。梅盛門。享保二年九月三日歿。著書 狂遊集

京 澤田由健

酌三寸や其身に風の神無月 由健

澤田氏名は正成、通稱三郎左衛門、友雪と號す。京都の人。立圃門(或は幸和門とも云ふ)

阿波 萩(萩原) 律(律友)

ちらは櫻日比預けし魂かへせ 律友

萩原氏、阿波徳島の人。宗因門。著書 四國猿。

京 高瀬元晴

なかなくに何をたねとて鶯菜 元晴

高瀬氏京都の人。

大坂 隅田路春

へうたんを出したねかやこまの爪 路春

隅田氏大坂の人。

京 鴨水只丸

弓はかり残りし柿の夕哉 只丸

高田宗の僧、京都本誓寺中福昌院の住職、法名覺印。弄松閣鴨水子と號す。後浪花欣淨寺に住す。椎本才麿門。正徳二年十一月二日寂、年七十餘。

辭世 陸を思ふ鴨やなにはの水ばなれ

著書 三阿じろ小松原、おのがひかり、足ざろひ明題集等。

京 河口保成

加那山の谷より出るや月いんす 保成

河口氏京都の人。

江戸 水間沾徳

枯野さへ麥に追るゝ仕業かな 沾徳

水間氏名は友兼、通稱治郎左衛門、合歡堂、友齋、羽衣道士沾葉等の等あり。初め露言(福田氏)門後露沾門。能書家にして、點印に代ふるに書を以てす。朱墨兩點を加ふる事茲に始まる。享保十一年六月卅日(一説五月廿九日)歿、年六十餘。

著書 幽蘭集、餘花千句、續文蓬萊、俳度曲、船たより等。

京 山田賀種

雪とみは今宵の月や冬男 賀種

山田氏京都の人。

京 中山榮治

年の矢のたつまきはらか大かさり 榮治

中山氏通稱忠右衛門。京都の人。貞徳門。鷹筑波に入選す。

大坂 淀屋ヶ庵

しくれても蜷のつらし松の色 重當

岡本氏、通稱淀屋三郎右衛門、幼名右衛門太郎。清味軒ヶ庵と號す。言當の孫、ヶ齋の男、辰五郎の父。大坂の人。元禄十年四月晦日歿。

江戸 芳賀一晶

花あやめ俳言あらむ藪菖蒲 一晶

芳賀氏名は治貞通名順益。冥靈堂崑山翁と號す。京都の人。令徳、常短に學び、後江戸に下り芝に住して醫を業とす。又繪をよくす。寶永四年四月一日六十餘歳を以て歿す。

著書 万水入海いかつほ了卯集、一塵重山、八宗懸隔等。

長崎 内田橋水

寢酒とは月見ぬ里のことはかな 橋水

内田氏。梅陽軒、舟山と號す。長崎の人。
著書 筑紫梅。

京 井上友房

夏の夜や月のねすみも鶉の尾 友房

井上氏京都の人。

京 佐々木道繁

去年とし咲ぬる萩は二四季哉 道繁

佐々木氏京都の人。梅盛門。

大坂 藤本盛庸

口たゝくくゐなは水のあはゝ哉 盛庸

藤本氏俳家大系圖に藤木氏とあり通稱七郎右衛門落飾して了因と號す。或は吞舟軒、幻々齋、遮莫堂、箕山子等の號あり。浪花の人京都に住す。貞徳門。また平澤了佐の門に入り古筆鑒定に達す。

著書 顯傳明名錄、好色大鑑。

江戸 田代松意

出かはりや侍かとおもへは作り髭 松意

田代氏名は秀延。琴風軒、川草子、檀林軒、冬嶺堂の號あり。大和の人。大坂の住。宗因門。寛文の末東府に下り、宗因風を弘む、江戸檀林の首唱者なり。

著書 軒端の獨語幕づくし等。

江戸 樋口山夕

うなひ子の鹽棚なし陰涼み 山夕

樋口氏二世宗阿齋と號す。石田未得の門。或は玄札門とも云ふ。

大坂 川崎正信

雨戸とは月見ぬ里の住ゐ哉 正信

川崎氏大坂の人。貞徳門。犬子集入選者。

京 鈴村信房

郭公の 日千句巻頭 一聲や杉原一帖ほとゝきす

信房

鈴村氏京都の人。

大坂 喜多田爲親

目をふさきみるや心の花盛

爲親

喜多田氏大坂の人。

京 鶏冠井令富

馬帋羽雪うちはらふ袖もなし

令富

令徳二男幼名清次郎壯歳に及んで作兵衛又半七と改む。歌道に造詣あり六十餘歳にして元禄末年頃歿す。

江戸 西岡泰徳

猩々や賣場とらるゝ山の花

泰徳

西岡氏江戸の人。江戸新道の作家。

京 内田正朝

年を経てすはるや花の鏡餅 正朝

内田氏京都の人。

京 藤原貞兼

さく藤の花桶なれやたこの浦 貞兼

藤谷氏名は貞好通稱甚吉仰雲軒又桂翁と號す。京都の人。初め令徳門後貞徳に屬す。元禄十四年十月廿七日歿年八十七。

辭世 月は彌陀ほさつや二十御來迎

江戸 服部嵐雪

鶯の宿とこそ見れ小揚はち 嵐雪

服部氏通稱彦兵衛幼名久米之助。雪中庵不白軒黃落庵玄峰堂石中堂寒蓼堂孤峯の號あり。初め嵐亭治助と號せり。淡州小椋並村の人。其角と共に兩の手に桃と櫻や草の餅と芭蕉に稱されし羽翼の門弟なり。寶永四年十月十三日歿行年五十四。駒込常檢寺に葬る。後雜司ヶ谷本教寺に移す。

辭世 一葉ちる咄一葉ちる風の上
著書 其袋若菜杜撰集其濱木綿等。

京 桑門 離雲

けふの月に我そなにかしの世捨人

離雲

京都清水寺の麓に草庵を結べる僧なり。梅盛門。

京 鷹峰 土也

月の良うつくしの形の穴候よ

土也

釋氏京都鷹峰住。西武門。

江戸 大野 集和

深草の櫻は白しかへり花

秀和

大野氏相水翁炭瓢齋。小西似春門。江戸の人。正徳四年四月歿年六十餘。

京 佐竹 直親

生り今朝初盞の瀝島

直親

佐竹氏京都の人

江戸 榎本 其角

昔たれ雪の舞臺の日の氣色

其角

寶井氏。(榎本氏は母方の姓なり。)醫竹下東順の子。幼名源助、通稱

は順哲。寶晉齋寶晉子、狂而堂善哉庵、文合庵、六病庵、狂雷堂、雷柱子、涉川、螺舍等の號あり。寛文元年江戸日本橋堀江町に生れ、茅場町、照降町、芝神明町、日本橋石町等に轉住す。書を佐々木玄龍畫を英一蝶、儒を服部寛齋、醫を草刈三越、禪を太巖和尚に學ぶ。十四歳芭蕉の門に入りて俳諧を學び、遂に第一の高弟と推重せらる。寶永四年二月三十日歿、年四十七、芝二本榎上行寺に葬る。

著書 田舎の句合、虛栗馬蹄二百句、蠶集、初懷紙、新山家續虛栗、新三百韻、いつを昔花摘、たれが家、雜談集、萩の露、歲旦帖、句兄弟、枯尾花、若葉合、末若葉俳諧錦繡、三上吟、焦尾吟、類柑子、五元集。

京 和田 蚊足

雪に客をとへは杖を筆にして月に去る

蚊足

和田氏通稱源七郎圓常と號す。京都の人。田中常矩の門。能筆なり。

大坂 徳成寺 智詮

足をさすたんはや鷹のぬくめ鳥

智詮

野々口立圃門。浪花徳成寺住職。

京 露吹庵 和及

名月我戀は晝の六時よけふの月

和及

高村氏或は三上氏とも露吹庵と號す。後洛西に隱栖して直唱法師

と呼ぶ。常長門。元祿五年正月十八日歿。

辭世 我としも四十四の花のあけ句かな
著書 藤浪集、雀の森ひこばえ等。

大津 小作 宗連

兄ににぬ花の弟や種かはり 宗連

小作氏、近江大津の人。

大坂 渡邊 未學

枯葉こそ古今の色を翠簾の葵 未學

渡部氏、大坂の人。宗因門。太夫櫻に入選す。

京 關 昌房

花の兄と種替り也弟草 昌房

關氏、通稱理右衛門、卜圃と號す。京都の人。貞徳門。

著書 小町踊。

備後 水野 福富

から衣木つちなれにしきぬた哉 福富

水野氏、名は勝重、通稱半内。從四位下美作守。備後福山藩士。季吟及梅盛に學ぶ。明暦元年二月十一日歿、年五十八。

著書 はりぬき。

仙臺 大淀 三千風

松島の木間の月や歌人の巢 三千風

大淀氏、名は部字は友翰。無玉庵、紫冥軒、鳴立庵、椿木庵、無月庵、無刀軒、寓言堂、吞空法師、一念堂、大箭數尺、鷗堂、東往居士等の號あり。勢州射和の人。永く仙臺に住す。歌俳共に師をとらずして達す。常に抖擻の癖あり、天和三年仙臺を發して旅に上り、日本全國を周遊し、元祿二年郷里に歸りて後また相州に赴きて、鳴立庵を結び、寶永六年四月四日自ら東往居士の碑を残し、行方定めなき旅に出づ。遺言により此の日を命日とす。

著書 仙臺大矢數、松島兩吟集、日本行脚文集、富士詣、三人物語、田鳥集、笈探等。

大津 國友 重軌

野も山も花になし氣や春の雨 重軌

山本氏、通稱國友。大津の人。立圃門。鐵砲鍛冶なり。

京 小野氏 範

彦七か顔や鬼待節分の夜 氏範

小野氏、京都の人。

京 本就院知春

松かねを七まとひまとふは藤じやけな

知春

京都本就院の住。

大坂 青木友雪

立よらん海士の焼さしことし麥

友雪

青木氏、松水軒と號す。西鶴と一日千句の興行あり。大坂の人。西鶴門。

江戸 草壁舉白

召スカたに只かしこまれ瓜作

舉白

草壁氏、江戸の人。芭蕉門。元祿九年歿。

京 伊藤頼富

松笠のあれはそそまぬやよしくれ

頼富

伊藤氏、通稱小左衛門。京都の人。定清門。

京 望月重方

下くゝる水の秋こそもみち鮎

重方

望月氏。通稱八右衛門。紹佐と號す。京都の人。重頼門。藪内流の茶道に通ず。

京 勝圓寺光正

見草臥てねてのひしてや足そろへ

光正

法名雲益、京都勝圓寺住職。山本西武門。

大坂 木原宗圓

是はく紅葉なけとや谷下風

宗圓

木原氏、大坂の人。宗因門。

京 神季貞

寢所の戸をあけ六ツの花見哉

季貞

神氏、京都の人。

大坂 槐本諷竹

後の世のとなと松のしくれ哉

諷竹

槐本氏、通稱伏見屋久右衛門。蟻門亭、北方之道と號す。芭蕉門。大坂の人。

堺 沙門 幽明

汗とりや日影に濡る雪さらし 幽明

釋氏、堺の人。

京 櫻井 友吉

更科の月四角にもなかりけり 友吉

櫻井氏通稱甚左衛門。京都の人。季吟門。

筑前 桑門 無心坊

首にかけん笠ぬひの島はつしくれ 西海

釋氏。西國と號す。豐後の人、筑前住。宗因及西鶴門。

伊丹 上島 青人

如月や法會くのかねのころ 青人

上島氏名は治房。常晉と號す。伊丹の人。重頼門。元文五年五月八日歿。

大坂 北條 團水

夏草に藁葺並ふ誰か筆 團水

北條氏、橘堂平元子、白眼居士と號す。初め西鶴門、後椎本才麿に従ふ。西鶴の歿後、その遺庵を守りて七年、西鶴庵と號す。京都の人、浪花の住。俳諧のほか、に浮世草子に筆を執れり。寶永八年正月四日歿、年四十九。辭世 おほろく引べく胸の月清し

大津 江左 尙白

つかふ程聲は出るとそ郭公 尙白

江左氏、通稱虎吉、大吉。字は三益。木翁、芳齋、老贅子と號す。貞室、不ト芭蕉に従ふ。大津の人、醫を業とす。享保七年七月十九日歿、年七十三。

京 小原 正在

みるに猶茂る柳や四方髪 正在

小原氏名は隆光。京都の人。初め西武、後貞徳門。

京 下村 康吉

是もまた秋このむ宮か女七夕 康吉

下村氏、通稱利兵衛、京都の人、季吟門。

江戸 三輪一鐵

此方はこの曉そほとゝきす 一鐵

三輪氏、江戸の人。初め宗因、後岸本調和門。

大坂 鳥路齋文十

白梅やはや勘つきて伐に出 文十

高橋氏、大坂の人。小西來山門。俗に宇陀野の文十と呼ばれたる人。

堺 松井方寸

波の花は何を種とか菊目石 方寸

松井氏、泉州堺の人。

京 福井重種

侘人もけふきかゆるやあり裕 重種

福井氏通稱新右衛門、京都の人。重頼門。

京 妙心寺大淵和尚

すみ染るわか水くきの吉書哉 玄弘

京都妙心寺住。

遊行上人

八幡はなをみて 一枝はゆみや八幡きりかやつ 他阿

相模藤澤遊行寺の住職。

大坂 長井蚊市

薦かつら壁をはなれて五六寸 蚊市

長井氏名は家久。伴白軒と號す。紀伊の人、大坂住。來山門。著書 住吉詣紀の山ふかみ。

越前福井住 可郷

夏の夜もさて長からむ番太郎 可郷

伊原氏、越前福井の人。季吟門。

大坂 林定明

青御座の香に寐つく夜の明にけり 定明

林氏、大坂の人。

伊勢 岩田團友

すゝしさの滯なし田の青み 團友

岩田氏名は正致、通稱權七。涼菟園友齋、神風館と號す。伊勢神宮の
祠官なり。芭蕉門。享保二年四月二十二日歿、年五十九。

辭世 合點じや其曉の時鳥。

著書 一幅半、皮籠摺、三疋猿、山中集等。

京 野田 本春

起もせずねの時や霜の花盛 本春

野田氏、重春の弟。京都の人。梅盛門。

江戸 富田 譽文

かくる夜は覆輪もかな空の月 譽文

富田氏、通稱助之進。江戸の人。立圃門。

大坂 坂本 吉醉

津國御影牛農子與親波汗須流石車 杏醉

元祿時代。

著書 京の曙、新湊。

京 谷崎 谷遊

餓鬼ゆくや姫瓜顔に油煙の墨 谷遊

谷崎氏名は貞之、谷遊軒と號す。種寛門。京都の人。元祿中。

著書 蟹釣舟。

京祇園 白井 春丸

誕生は釋迦無理佛よ脇の下 春丸

白井氏、通稱七郎兵衛。京都祇園の人。貞室門。

大坂住 澤井氏女そ河

捨られぬ色よ隠者の菊の世話 そ河

澤井氏、大坂の人。

江戸 小西 似春

ゑほしきる心に成ぬ今朝の春 似春

小西氏、通稱加賀屋三郎右衛門。初め里村家に學びて連歌師たり、大坂の人、江戸に住し、後下總行徳の社職たり。季吟門。享保中。
著書 芝さかな、山の端千句等。

大坂 牧野 晴嵐

時しらぬ時雨しろなら鳥の聲 晴嵐

牧野氏、通稱平左衛門。香橋軒と號す。大坂の人。
著書 難波津三十歌仙。

淀 森 三 箇

あふ坂の杉葉さしけり孕鮒 三 箇

森氏稱宗玄。不水子と號す。安靜及芭蕉門。京都の人。

大坂 根來芝柏

花はみな後についたる名てこさろ 之 白

根來氏無量坊宗雲又芝柏と號す。堺の人。大坂住。芭蕉門。正徳三年六月十三日歿年七十。

京 井狩友靜

をつはらひ跡しら波や御稜川 友 靜

井狩氏二郎兵衛と稱す。春夕子と號す。京都の人。定清及季吟門。

伊勢 高島及加

立といはてしらする春の初日哉 及 加

高島氏通稱善太夫伊勢山田の人。立札の従弟。加友門。

攝州櫻塚住 西 吟

煤はきやこゝろは物にくるはね共 西 吟

水田氏。落月庵岡松軒と號す。攝津櫻塚の人。西鶴門。能書にして、師西鶴の「一代男」は此の人の筆なりと云ふ。

著書 西行櫻、鬼の目やよひ山、浪花ざくら、鹽味集菜の花等。

大坂 中村一禮

眼猶魚の如しやすまの月 一 禮

中村氏名は志計柏屋市左衛門と稱す。大坂の人。宗因門。

京 小谷立靜

郭公聲なかりせは氣樂哉 立 靜

小谷氏京都の人。

著書 古今四季の友。

大坂 十方窩天垂

閑居して百あらは鳴ころされんきりくす 天 垂

談林派。大坂の人。

塙 藤井宗爾

家つとや花ある大和物かたり 宗爾

藤井氏塙の人。

丹波 松苔軒可常

秋の季に入る先達や峯の霧 可常

丹波國神池寺中中性院の住職。季吟門。
著書 法の花。

塙 原田貞伸

むかし誰かゝる網してさくら鯛 貞伸

原田氏塙の人。

京 汲谷軒好春

釣置て蚊帳ひやし寝る夕哉 好春

兒玉氏向陽堂と號す。京都の人。山岡元隣の門。寶永四年八月十一日歿。年五十九。

大坂 榎並舍羅

神法 如月や雪をたゝいてかしこまり 舍羅

榎並氏空草庵と號す。大坂の人。初め之道(諷竹)門後芭蕉門。
著書 荒小田みの笠追鳥狩等。

京 池田常知

佐保姫と山姫いつれ姉妹 常知

池田氏名は常久通稱九郎左衛門。京都の人。立圃門。

大坂 小野松緑

早瀬川鮎のおはゆる小石かな 松緑

小野氏大坂の人。宗因門。

江戸 高井今立志

思ふ程泣を遊女の歳忘 立志

高井氏(二世)名は吉章幼名犬松。初め松雨軒立詠と號し落飾して和諧堂と改む。一世立志の次子なり。立圃門。寶永元年八月十日歿。年四十八。淺草常福寺に葬る。
著書 雪の果庭の卷等。

大坂 光吉 定祐

出かはりて松さへすきに成りにけり 定祐

池草氏名は光吉。大坂の人。宗因門。延寶年中。

京 高島 轍士

如月やちよつちよと門か見たふなる 轍士

高島氏、楓翁、佛狸齋、東鮎庵、風翁等の號あり。京都の人。宗因門。寶

永四年歿。

著書 花見車、糸屑世の爲、白眼、尾山集、後瀬山夜櫻、我庵、此日、七車集、葵車、黒うるり、似我蜂、わだち等。

大坂 岩橋 豐流

春しれと神の禁に梅給ふ 豐流

岩橋氏、通稱豐春。攝津天王寺の人。宗因門。

著書 天王寺名所彼岸櫻。

江戸 阿形 但秀

春の日は雪の後引鼠かな 但秀

阿形氏、江戸の人。

京 福井 重昌

行年を惜まぬもやかてあまの事 重昌

福井氏、通稱七右衛門。重種の從弟なり。京都の人。重頼門。百人一句の一人なり。

伯耆住 荒尾 直久

あつき日やふた／＼ひらく扇箱 直久

荒尾氏、伯耆倉吉の人。貞徳門。寛文年中。

大津住 原 不ト

所々の花後にそいたむ笠のうら 不ト

原氏、近江大津の人。

江戸 由良 正春

試筆日のもとにもとの日はふあした哉 正春

由良氏、通稱八郎左衛門。京都の人。江戸に住す。歌道に達し、又連俳を能くす。立圃門。竹下東順の師たり。寛文中歿す。年八十餘。類柑子に正春の事見えたり。

辭世 夢なれや花は昨日けふの風

大坂 乾 昨 非

吾庵は佛くふ蚤もすみに鳧 昨 非

乾氏、藥香軒と號す。岡山の人、大坂住。初め立圃、後宗因門。
著書 繩すだれ、星祭、根合集等。

池田 坂上 稻 丸

年とくや、ふしわかねは花の菴 稻 丸

坂上氏、名は頼屋、字は宗仙、太郎右衛門と稱す。攝津池田の人、酒造業。
元文元年十二月十九日歿、享年八十三。

大坂 長井 伴 自

松の名を付にまはるや秋の月 伴 自

長井氏、名は家久、蚊市と號す。紀伊の人。大坂住。來山門。

京 稱好 軒 慈 敬

元龍かかくれし月の鼠くひ 慈 敬

釋氏、京都の人。

阿波 細井 釣 寂

おこかまし蚤とる指のかまへやう 釣 寂

細井氏、阿波の人。

奥州 江口 塵 言

照君か繪にかく前の美人草 塵 言

江口氏、三郎右衛門。奥州二本松の人。重頼門。

泉 忍 尾 崎 吉 田 尾 蠅

身は既疝氣や告る今朝の秋 尾 蠅

吉田氏、泉州尾崎の人。宗因門。太夫櫻入選。

堺 駒 井 貞 繼

水かねか露かこたへよか、み草 貞 繼

駒井氏、泉州堺の人。重頼門。犬子集に入選す。

京 朝 江 種 榮

風に羽をのしめやたんの浦千鳥 種 榮

朝江氏。種寛の兄。京都の人。貞徳門。

大坂 藤井智徳

書初や我は天筆和合樂 智徳

藤井氏。通稱長右衛門、智徳、來徳と號す。大坂の人、京都住。立圃門。

江戸 山口素堂

御手洗や半流るゝ年わすれ 素堂

山口氏(一世)名は信章、字は子達(一に子晋)通稱官兵衛、來雪と號す。葛飾隠士、今日庵、其日庵、信章齋、素仙堂、蓮池翁等の別號あり。北村季吟の門。甲斐の人、初め江戸東叡山下に住み、後葛飾郡阿武に住す。葛飾風の祖にして又芭蕉と風交あり。享保元年八月十五日歿。年七十五。谷中感應寺に葬る。

辭世 我をつれて我かけ歸る月見かな
著書 とくくの句合、松の奥。

京 三澤主馬首

若はえは柳の髪のおくれかな 國信

三澤氏、壹岐守。京都の人。井上友貞門。

京 山本善入

粟つふももれぬや彌陀の光明寺 善入

山本氏、京都の人。貞室門。延寶年中。

大坂 安平次幸方

夕貞やむかしもやうのほしてある 幸方

安原氏、通稱左平次。大坂の人。宗因門。

大坂 佐倉笑種

打明て水のうら見る氷かな 笑種

佐倉氏。松風軒、案山子と號す。大坂の人。『俳諧手鑑後集』の編纂者。元祿年中。

伊丹 森本百丸

松の木に啼鶯はきかぬ也 百丸

森本氏、白鷗堂と號す。伊丹の人。重頼門。鬼貫等と伊丹風を鼓吹す。享保十一年七十二歳の時、在岡俳諧逸士傳の著あり。

京 木村好與

帶に似ぬ時雨やめくる山の腰 好與

木村氏。京都の人。立圃門。

京 事足軒未及

色よりも香こそあつはれ雪の梅 未及

京都の人。

紀州 日方貞長

藤森やふしみ小枝の花さかり 貞長

日方氏、紀伊の人。

京 吟花堂 晩山

虫聞に行や萩野の二人つれ 晩山

爪木氏、二重齋、吟花堂、永可等の號あり。京都人、宮川松堅門。享保十五年八月十五日歿、年六十九。遺言により長泉寺中兼好法師の墓の傍に碑を立つ。

辭世 まめでるよ身はならはしの草の露

江戸 豊島 東首

いかに漁翁まкру舟出せ富士の雪 東首

豊島氏、江戸の人。

京 青木春澄

五月雨は鳶のうきすをかけてけり 春澄

青木氏通稱庄右衛門、落飾して貞悟と號す。之乎翁、素心子、印雪軒等の別號あり。京都の人。初め重頼、後貞恕門。正徳五年七月二十日(或は三十日)歿。年六十三。

堺 原田信勝

さみたれや鼓の瀧の大なかし 信勝

原田氏、泉州堺の人。

尾州 高木皆醉

元三の車か夜半の郭公 皆醉

高木氏、尾張の人。

江戸 岡村不ト

郭公本尊や雨にぬれ佛 不ト

岡村氏通稱市郎右衛門、一柳軒と號す。江戸の住。石田未得門。元祿四年四月九日歿。本所法恩寺に葬る。著書 續の原、向のをか、江戸廣小路等。

京 瀧 方 山

照らは桃降れは柳の節句哉 方 山

瀧氏通稱主水。應々翁、招鳩軒、峰山、芳山の號あり。初め重頼後似船門。京都の人、東本願寺の家士たり。享保十五年五月廿二日歿、年八十。著書 曉山集。

京 望 月 千 春

あふた時笠を拔也早松茸 千 春

望月氏、通稱彦四郎。蘇鐵林と號す。千之の從弟。大坂の人、京都住。宗因門。

著書 武藏曲。

江戸 小坂井雪柴

目のこえた人に見ゆらん江戸櫻 雪 柴

小坂井氏、又飯野氏、通稱庄左衛門。江戸の人。宗因門。談林十百韻の作家。

姫路住 幸 田 正 舍

雪ならはいくたひ袖をうとんの粉 正 舍

寺田氏。姫路の人。

京 山 岡 元 恕

豆よいつそふ年ひとつくかみ 元 恕

山岡氏、元隣の從弟。京都の人。季吟門。

江戸 野 口 在 色

短夜とよくおしうつるかきつ哉 在 色

野口氏、名は利直、通稱甚八郎。市喧堂と號す。遠州の草崎村生れ、長じて白木商となり、延寶年間には皇居御造營の工事を請負ひて完成せり。居を信州箕輪の庄に、營業所は江戸に構へて發展せり。晚年居村に隠居して俳道に遊び、耳順の頃より長松堂箕形と改名、享保三年遠州草崎村に滞在、中病にかゝり、床中に「俳諧解脱抄」及「曉眠起」の二冊を草し、故郷の門人、伊澤在風に送りて、翌四年九月十五日歿す。年七十七。辭世 墓の霜當座斗りぞ白宇留里

參州 神 戸 可 入

梅や是すけなりといふも花の兄 可 入

神戸氏、三河の人。

京 岩 井 不 尺

よをこめて月影や見る竹れんし 不 尺

岩井氏。京都の人。

尾州 山本荷兮

爪のみも旅の姿や駒むかへ 荷兮

山本氏、通稱武右衛門、檀木堂と號す。名古屋の人。芭蕉門。著書 春の日、曠野集、晝寢の種、橋守集、青葉葛、烏おとし等。

江戸 遠藤正友

姥ひとり花鬼灯を泣野かな 正友

〔上編に出づ〕

京 堀江林鴻

春雨に九ツあまる枕哉 林鴻

堀江氏名は重則。雲風子(風雪子といふ説あり)煙月堂と號す。近江の人。似船門。

著書 京羽二重。

郡山 淨専寺遠川

夕顔のつる葉や露の玉かつら 遠川

大和郡山淨惠寺住職。

京 寺田重德

河邊に風商床の夕かな 重德

寺田氏、京都の人。信徳門。

江戸 筒井宣安

春雨のふるやらなるは瀧の水 宣安

筒井氏、江戸の人。

京 平野尙好

北野にて 白梅はこや玉かきの白幣 尙好

平野氏、京都の人。

參州 小野愚侍

五月雨に名こそおしけれ山の神 愚侍

小野氏、三河の人。

江戸 出來松白

青からし目を驚かす有様也 松白

出來氏、江戸の人。宗因門。談林十百韻の作家。

京 神明別當秀延

風のやふる帷子もかなはせを布 秀延

京都神明別當。

江戸 進藤世恥子

いつれてふ拔手綿買ほとゝきす 世恥

進藤氏名は利政、通稱利右衛門。京都の人。初め貞徳、後貞室門。

大坂 福養愛貞

親のこと猶おもひ出す火燧哉 愛貞

福養氏。大坂の人。

攝州 金藏寺櫻叟

御奴やなまりてもとる駒むかへ 櫻叟

播州金藏寺の住職。

京 中尾我黒

さくらさく土そとつゝむ吉野山 我黒

中尾氏、李洞軒、青白翁、舟叟子と號す。京都の人。重頼門。寶永七年

十月六日歿。年七十一。

著書 橋立紀行。

大坂 武村萬海

草々に人の氣をとるこてふ哉 萬海

武村氏名は昌數、素琴亭、曳尾堂、益友と號す。大坂の人。前川由平門。

江戸 松木青雲

此浦にふく汁とはん濁酒 青雲

松木氏、江戸の人。幽山門。

堺 佐田松安

七わたに曲るや露の玉柳 松安

佐田氏、泉州堺の人。

出羽野代住 里 鶯

としの賀を 祝ひ侍りて 聲そ春幸からす年の賀あ 里 鶯

平賀氏名は尊閑。誘引齋、少蝶庵と號す。秋田常福院の修驗者。元文二年八月十一日歿。年八十七。

出雲 日置主殿

しさいらし身は元日の餅袋 風水

日置氏。主殿と稱し、空原齋と號す。出雲日御崎の人。寶永五年九月歿。

京 五十嵐良和

柴垣もつゝむや梅のはな袋 良和

五十嵐氏、京都の人。

京 那波江雲

蟬のから松風計や残るらん 葎宿子

那波氏、通稱江雲。櫟軒、志好の號あり。京都の人。山本梅盛門。

江戸 福田露言

ゆつりはの店よ等閑の友ならす 露言

福田氏（二世）。風琴子、素竹軒と號す。はじめ調和の門に入りて調也の號あり、後露沾門に入る。江戸の人。元祿四年四月十日歿。年六十。

大坂 黒川六翁

能登鯖やをしまか磯の月も見む 六翁

黒川氏。大坂の人。宗因門。

尾州 古渡堂横船

癖とても常なき秋の扇哉 横船

尾張の人。

京 中野仲昔

置露は氷砂糖か萩の華 仲昔

中野氏、通稱久右衛門。京都の人。立圃門。

京 觀音寺智泉

降つもる惟子雪の平野哉 智泉

京都觀音寺住職。樂圓と號す。梅盛門。

伊丹 上嶋佛兄

秋はものゝ月夜からすはいつも啼 佛兄

上島氏、名は治房、通稱惣兵衛。伊丹の酒造家上島宗次の三男として

生る。鬼貫、植花翁、馬樂童、即翁、自休庵、囉々哩居士等の別號あり。筑後の立花侯及大和の本田侯、越前大野藩に仕へたる事あり。松江重頼の門人なれども、宗因を友として、檀林風の句を吐き、所謂伊丹風の祖となれり。元文三年八月二日歿す。年七十八。伊丹墨染寺に葬る。

著書 七車ひとり言、獨吟百韻、惠能珍、有馬日記、犬居士、大悟物狂等。

江戸 蝶々子妻

せつふんや打物かたらひてまめをとこ

女山人

神田貞宣の妻。江戸の人。女六俳仙の一人。

江戸 松尾芭蕉

ゆふかほや秋はいろくのふくへ哉

はせを

松尾氏名は宗房、通稱甚七郎、或は忠右衛門。(通名に諸説あれども略す)はじめ宗房の號を用ひ、後桃青、芭蕉を用ふ。別に釣月軒、風羅坊、天々軒、鳳尾、羽扇等の號あり。俳諧正風の祖たり。正保元年伊賀上野に生る。(拓植出生説あり)幼にして藤堂主計良忠(蟬吟)に仕ふ。寛文六年四月蟬吟公逝去、六月遺髪を高野山に納む。寛文六七年の頃、洛に到りて北村季吟に學ぶ。また書を北向雲竹に學び、儒を田中桐江に、詩を伊藤坦庵に學べりと傳ふ。寛文十二年江戸に下る、延寶八年(異説あり)深川の草庵に移り住む。天和二年草庵類焼して甲州郡内に流寓す。貞享二年野ざらし紀行、元祿元年卯辰紀行。更級紀行。元祿二年奥の細道。紀行。元祿七年九月泄痢を病み。十月十二日、大坂花屋仁左衛門の裏座敷に於て歿す。年五十一。栗津義仲寺に葬る。

京 朝倉茂入

五月雨は木火土金のお留守かな 道順

朝倉氏茂入と稱す。京都の人。

天王寺秋之坊

生魂花の影社壇に上る月夜哉 露情

釋氏、大坂天王寺の人。

京 要法寺日躰上人

蓬萊や嶋代々の花王 友閑

京都要法寺住職。貞徳門。

内藤下野守殿

子規何を古井の水の色 露沾

内藤氏名は義英。内藤左京亮(風虎)の嫡男。病の爲に廢嫡され、磐城高月に住す。遊園堂、傍池亭の號あり。父と共に宗因の門。享保十八年九月十四日歿。年七十九。

西洞院殿時成卿

番ありや冠たゝさし花の下 牧

正二位權大納言西洞院時成。和歌を能くす。享保九年閏四月九日歿。年八十。

細川殿玄旨法印

うつゝにはかさつばかりをねこの戀 玄旨

細川氏名は藤孝、通稱與一郎、幽齋と號す。丹後田邊の城主。從二位法印。三條實枝に古今傳授を受け、和歌連歌をよくし、典故に通ず。慶長十五年八月廿日歿。年七十七。



【图书】		【备注】
1	1	1
2	2	2
3	3	3
4	4	4
5	5	5
6	6	6
7	7	7
8	8	8
9	9	9
10	10	10
11	11	11
12	12	12
13	13	13
14	14	14
15	15	15
16	16	16
17	17	17
18	18	18
19	19	19
20	20	20
21	21	21
22	22	22
23	23	23
24	24	24
25	25	25
26	26	26
27	27	27
28	28	28
29	29	29
30	30	30
31	31	31
32	32	32
33	33	33
34	34	34
35	35	35
36	36	36
37	37	37
38	38	38
39	39	39
40	40	40
41	41	41
42	42	42
43	43	43
44	44	44
45	45	45
46	46	46
47	47	47
48	48	48
49	49	49
50	50	50
51	51	51
52	52	52
53	53	53
54	54	54
55	55	55
56	56	56
57	57	57
58	58	58
59	59	59
60	60	60
61	61	61
62	62	62
63	63	63
64	64	64
65	65	65
66	66	66
67	67	67
68	68	68
69	69	69
70	70	70
71	71	71
72	72	72
73	73	73
74	74	74
75	75	75
76	76	76
77	77	77
78	78	78
79	79	79
80	80	80
81	81	81
82	82	82
83	83	83
84	84	84
85	85	85
86	86	86
87	87	87
88	88	88
89	89	89
90	90	90
91	91	91
92	92	92
93	93	93
94	94	94
95	95	95
96	96	96
97	97	97
98	98	98
99	99	99
100	100	100



昭和五年十一月十四日印刷
昭和五年十一月十七日發行
【定價八圓】

著者 伊藤松宇

發行者 岡本正一
東京市麹町區下六番町四十八番地

印刷者 太田米吉
東京市麹町區錦町三丁目五番地

印刷所 合名 太田印刷所
東京市麹町區錦町三丁目五番地

美觀所 東京プロセス社
東京市芝區愛宕町三丁目三十二番地

發兌 厚生閣書店
東京市麹町區下六番町四十八番地

振替東京五九六〇〇番
電話九段三二一八番
柳原

